

平安京右京六条二坊十二町跡 発掘調査報告書

2 0 2 1

株式会社 文化財サービス

例 言

- 1 本書は、京都市右京区西院東中水町 17 番地、下京区西七条御前田町 4 番地で実施した、平安京右京六条二坊十二町跡の発掘調査成果報告書である。(京都市番号 20H223)
- 2 調査は、ビル新築計画に伴い実施した。
- 3 現地調査は、平安埋蔵文化財事務所株式会社より株式会社文化財サービス（以下、「文化財サービス」という）に委託され、辰巳陽一（文化財サービス）が担当した。
- 4 調査期間は令和 2 年 10 月 5 日～12 月 18 日である。
- 5 調査面積は 525 m²である。
- 6 本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高は T.P.（東京湾平均海面高度）である。
- 7 土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
- 8 本書の執筆は辰巳、辻本裕也（株式会社古生態研究所）が行い、編集は辰巳、吉川絵里（文化財サービス）が行った。
- 9 現地での記録写真撮影は辰巳が行い、出土遺物の撮影は写房楠華堂（内田真紀子氏）に依頼した。
- 10 調査に係る資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
- 11 発掘調査および整理作業の参加者は、下記の通りである。

〔発掘調査〕 山内伸浩、田中慎一、小林一浩、吉岡創平、上田智也（以上、文化財サービス）、作業員（株式会社京カンリ）

〔整理作業〕 望月麻佑、多賀摩耶、森下直子、中 優作、場勝由紀菜、古谷眞由美、野地ますみ、神野いくみ、上野恵己、甲田春奈、下市沙耶香、溝川珠樹、内牧明彦（以上、文化財サービス）
- 12 自然科学分析については、株式会社 古生態研究所に依頼した。
- 13 出土遺物の年代観は、平尾政幸 「土師器再考」『洛史 研究紀要 第 12 号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019 年
古代の土器研究会 「古代の土器研究－平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に－」真陽社 2003 年
中世土器研究会編 「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社 1995 年に依った。
- 14 現地調査、整理作業において、下記の方から御教示をいただいた。記して感謝いたします。

（敬称略）

國下多美樹（龍谷大学）、浜中邦弘（同志社大学歴史資料館）

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯

1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
3 測量基準点の設置と地区割り	3
4 整理作業・報告書作成	3

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境	5
2 既往の調査	5

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序	12
2 検出遺構	12
(1) 東区第1面	12
(2) 東区第2面	13
(3) 西区	14
3 出土遺物	15
(1) 東区第1層出土遺物	15
(2) 東区第2面遺構出土遺物	16
(3) 西区遺構出土遺物	20

第Ⅳ章 まとめ	22
---------	----

附章 自然科学分析

平安京右京六条二坊十二町跡の古環境復原（株式会社古生態研究所 辻本裕也）	27
--------------------------------------	----

図版目次

図版1	調査区東壁・西壁土層断面図（1：100）
図版2	調査区南壁土層断面図（1：100）
図版3	調査区北壁土層断面図（1：100）
図版4	東区東西セクション土層断面図（1：100）
図版5	第1面 調査区全体平面図（1：200）
図版6	第2面 調査区全体平面図（1：200）

図版 7	東区 河001・溝003平面図（1：80）
図版 8	東区 溝002平面図（1：80）
図版 9	西区 井戸015平・立・断面図（1：50）
図版 10	出土遺物 1（1：4）
図版 11	出土遺物 2（1：4）
図版 12	西堀川小路検出地点配置図（1：10,000、1：800）
図版 13	遺構 1. 調査地遠景（調査地上空より北方 五条通りを望む） 2. 東区第1面 遺構検出状況（上が北）
図版 14	遺構 1. 東区第2面 遺構完掘状況（上が北） 2. 西区 遺構完掘状況（上が北）
図版 15	遺構 1. 西区 井戸015枠内完掘状況（東から） 2. 西区 井戸015掘方半裁断面（東から）
図版 16	遺物 1. 河001上層出土遺物 2. 河001下層出土遺物
図版 17	遺物 1. 河001出土瓦・埴 2. 溝002出土遺物
図版 18	遺物 1. 井戸015枠内出土遺物 2. 井戸015枠内出土木製品

挿図目次

図 1	調査位置図（1：2,500）	1
図 2	調査経過写真	2
図 3	調査区地区割・基準点配置図（1：200）	4
図 4	既往調査位置図（1：5,000）	6

表目次

表 1	既往調査一覧	9
表 2	遺構概要表	12
表 3	遺物概要表	15
表 4	遺物観察表	25

第Ⅰ章 調査の経緯

1 調査に至る経緯（図1）

京都府京都市右京区西院東中水町17番地、下京区西七条御前田町4番地において、ビルの建設が計画された。建設予定地は平安京右京六条二坊十二町跡および西堀川小路跡の範囲内にあたる。そのため、建設工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）による試掘調査が実施された。その結果、平安時代の西堀川跡および遺物の存在が確認され、発掘調査を実施することとなった。調査は、平安埋蔵文化財事務所株式会社から株式会社文化財サービス（以下、「文化財サービス」という）に委託された。

2 調査の経過（図2）

発掘調査は令和2年10月5日から現地作業に着手し、12月18日にて全ての工程を完了した。調査区は、文化財保護課の指導により東西35.0m、南北15.0m、面積は525.0㎡に設定した。なお、発生する残土の仮置き場確保のため、調査区を東西に二分割し、各々東区、西区とした。西堀川跡の検出が予想される東区は、流路跡の東西両肩を検出することができるよう、東西幅20.0mに設定し、残る15.0mを西区とした。調査は東区から開始した。

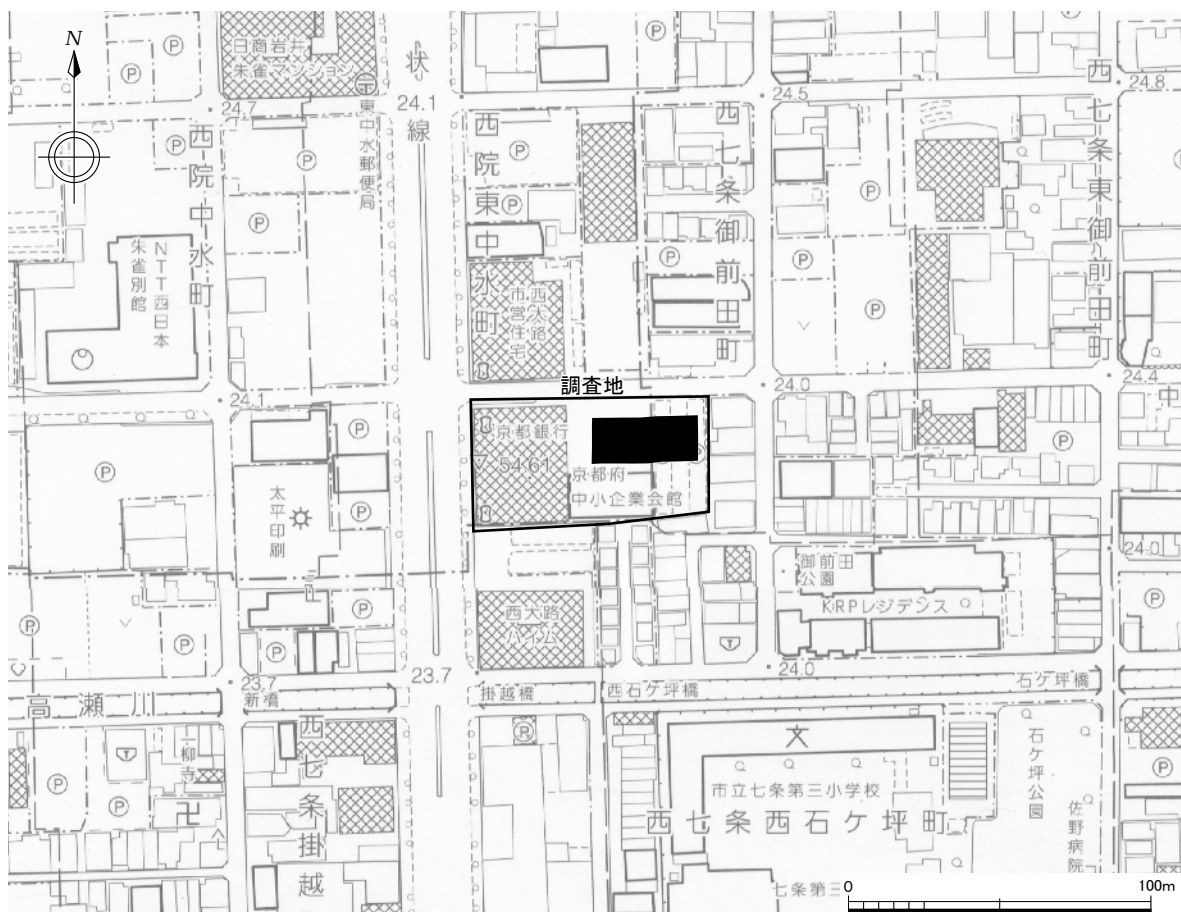


図1 調査位置図（1：2,500）



1. 調査着手前（北東から）



2. 重機掘削作業（北西から）



3. 東区グリッド杭打設作業（南から）



4. 東区河001 掘削作業（北西から）



5. 西区遺構掘削作業（南西から）



6. 西区井戸015 枠内掘削作業（北東から）



7. 埋め戻し作業（南西から）



8. 調査完了後（北東から）

図2 調査経過写真

近現代整地土および近世以降の耕作土を重機掘削によって除去し、その後、人力によって第1面の精査および遺構検出を行った。その結果、東区では上層から切り込まれた攪乱を多数、西区では東西、南北方向の耕作溝数条を検出した。これらを人力にて掘削後、記録作業を実施し、人力によって第1面の遺構ベース層を掘削、除去した後、第2面の精査、遺構検出を行った。但し、第1面の遺構ベース層を形成していた中世の耕作床土層は東区でのみ確認され、西区では重機掘削によって除去した近現代整地土および近世以降の耕作土直下で基盤層が露出した。このため、東区は2面調査、西区は1面調査となった。東区において西堀川の流路跡の他に溝2条、西区において上記耕作溝に加えて井戸1基を検出した。これらの遺構を人力にて掘削後、記録作業を実施した。記録作業の完了後、調査区南壁際を断割って下層確認を行った後、埋め戻しを行った。

なお、写真撮影機材は、35mm フルサイズの一眼レフデジタルカメラ、35mm 白黒フィルムおよびカラーリバーサルフィルムを使用し、図面作成にはトータルステーションによる図化、写真測量を併用した。

現地調査においては、適宜、文化財保護課の検査および指導を受けた。また、遺構検出段階および掘削段階において、本調査の検証委員である龍谷大学教授國下多美樹氏、同志社大学歴史資料館准教授浜中邦弘氏の現地視察・検証を受け、調査に対する助言を頂いた。

3 測量基準点の設置と地区割り（図3）

測量基準点は、VRS 測量により調査地敷地内に T . 1、T . 3 を設置し、その2点からトータルステーションにより T . 2 を設置した。基準点測量の成果は以下の通りである。

T . 1 X = -111,541.737 m Y = -24,351.948 m H = 23.834 m

T . 2 X = -111,555.420 m Y = -24,371.993 m H = 23.574 m

T . 3 X = -111,538.686 m Y = -24,392.980 m H = 23.614 m

検出遺構および出土遺物の管理のため、調査区に対して3mグリッドを設定した。Y軸にアルファベットを西から東へ、X軸にアラビア数字を北から南へ順に付し、両者の組み合わせで地区名とした。地区名は、グリッドの北西角を基準とした。

4 整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業および報告書作成を行った。整理作業は写真、図面の整理と出土遺物の整理を並行して実施した。遺物の整理は洗浄、接合、実測、トレース、復元、写真撮影を行った。報告書の執筆は調査を担当した辰巳陽一、編集作業は辰巳、吉川絵里が担当し、その他整理作業は当社社員が分担して行った。

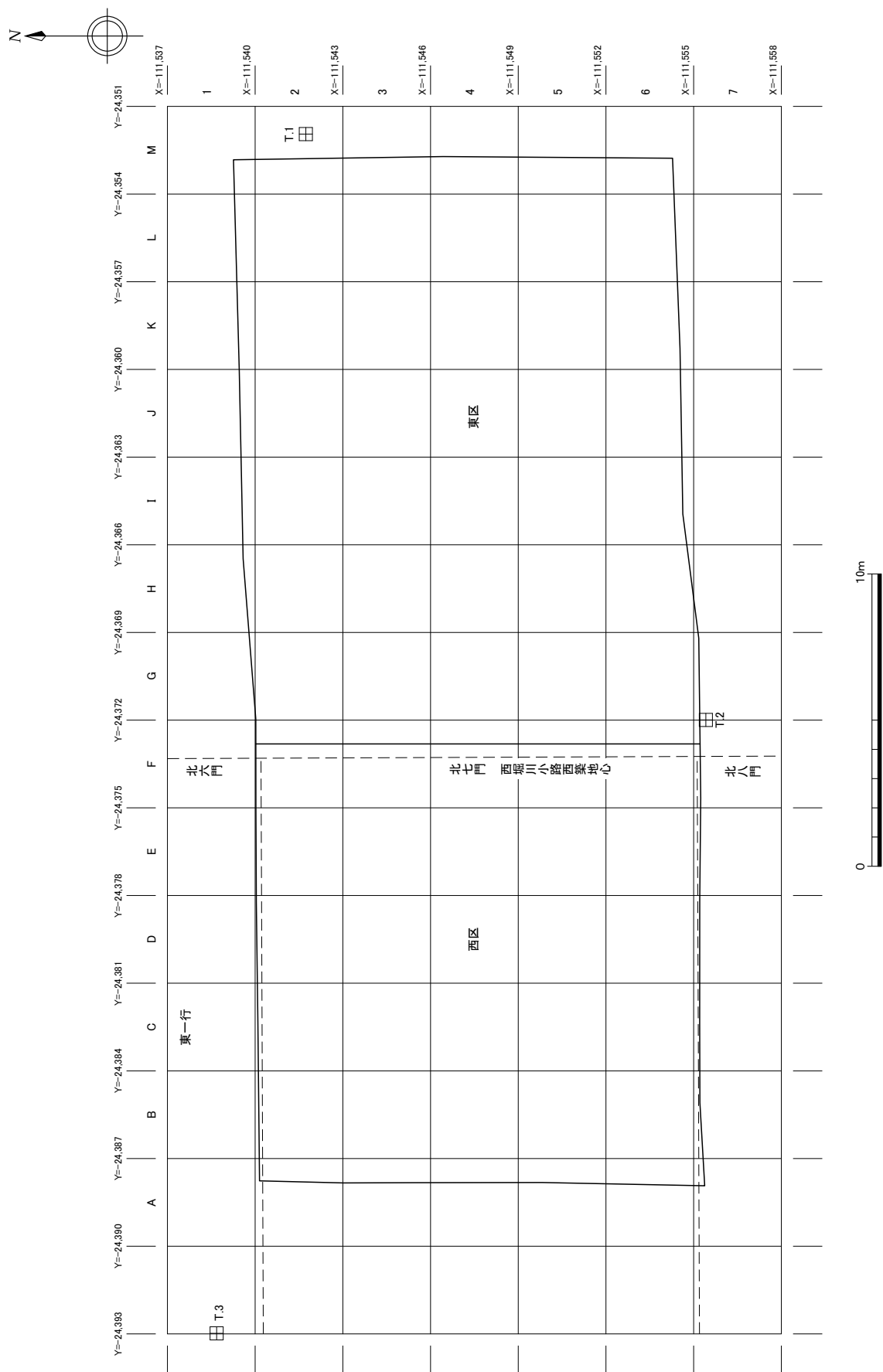


図3 調査区地区割・基準点配置図 (1 : 200)

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境

調査地は、平安京の条坊では右京六条二坊十二町の南東部および西堀川小路に相当する。『拾芥抄』西京図によると、右京六条二坊一・八町は小泉荘、三～六町は号山荘であったとされているが、実態は詳らかではない。また、二町跡では平安時代前期の西鞠負小路、樋口小路の側溝および路面、建物跡など、四町跡では平安時代後期の六条大路北側溝、六町跡では平安時代前期の井戸、十町跡では平安時代前期～中期の掘立柱建物群、柵列などに加えて鎌倉時代の農耕遺構、十一町跡では西堀川および西堀川小路東路面、十五町跡では道祖大路の築地および東側溝が検出されている。また、調査地の南東には西市跡が位置する。西市は、『日本紀略』に「延暦十三年七月辛未朔。遷東西市於新京。且造厩舎。且遷市人。」と見え、延暦十三（794）年の平安京遷都とともに、東市と並び設置されたとされる。当初は七条二坊三～六町の方四町を占め、その後拡大して『拾芥抄』の西京図では、西大宮東二町、七条坊門北二町、西堀川西二町を加えて計十町を市町としている。西市は左京の東市が栄えるのに対して徐々に衰退し、『宝鏡寺文書』に見える建武四（1337）年十一月十八日付の売券によれば、「七条坊門鞠負」の地を含む「西市町田地」二反半が売買されており、当該期には耕地化されていたことが判る。中世には調査地の現住所である右京区西院東中水町は西院村、下京区西七条御前田町は西七条村の一部になり、江戸時代には農村として発達した。

2 既往の調査（図4、表1）

調査地周辺では、これまでに発掘調査、試掘調査、立会調査が実施されている。それらについて、調査地を図4に示し、成果を表1にまとめた。六条二坊十二町内では1997年に町内南西部で行われた立会調査（図4、表1-30、以下図・表番号略）において、野寺小路の側溝、路面整地土が検出され、平安時代後期の遺物が出土している。

西堀川および西堀川小路に関する遺構は、1980年に右京五条二坊五町跡（2）、1983年に右京七条二坊七町跡（36）、2006年に右京六条二坊六・十一町跡（45）で実施された発掘調査、1990年に実施された右京六条二坊七町跡の試掘調査（22）、1981年から1982年にかけて右京五・六条二坊跡で実施された立会調査（41）において検出されている。

また、1982年に実施された右京三条二坊十町跡の発掘調査⁽¹⁾においても西堀川流路、西堀川小路の東西路面および西側溝が検出されている。西堀川流路は南北20.0m分が検出され、幅6.0m、深さ1.0mを測り、両岸には杭跡が並んだ状態で検出された。西側溝は東肩の一部が検出されたが、西肩は調査区外になるため幅は不明、深さは約1.0m分が確認された。また、西堀川西岸の杭列から西側溝東肩までの距離が約6.0mであることから、西堀川小路西路面の幅は6.0m（二丈）であったことが確認された。2012年に実施された右京二条二坊十一町跡の調査⁽²⁾では西堀川流路、西側路面、西側溝、東側路面が検出され、西堀川流路は幅5.0～5.5m、西側路面は幅4.0

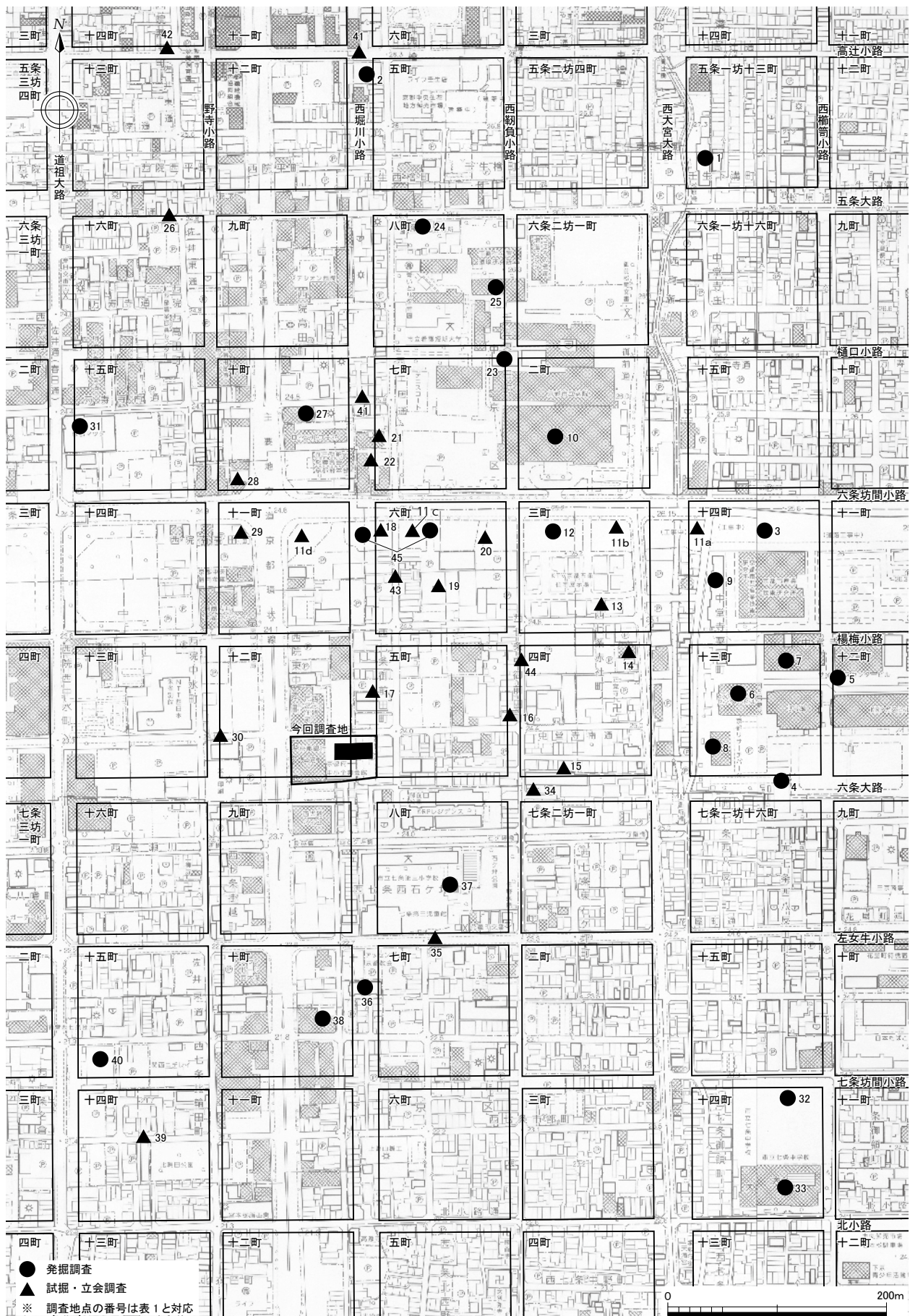


図4 既往調査位置図 (1 : 5,000)

～5.5 m、西側溝は幅3.3～5.5 m、東側路面の幅は4.2 m以上であることが確認された。西堀川流路の兩岸には護岸のためと考えられる杭列が数列検出されている。2015年に右京四条二坊十一町跡で実施された調査⁽³⁾では、西堀川流路、西側路面、西側溝に加え、西側内溝と考えられる南北溝が検出されている。西堀川流路は南北約31.0 m、幅は5.5～5.7 m、路面上面からの深さは0.9 m前後で、兩岸は杭と横板で護岸されており、護岸杭列の東西間幅は4.5 m前後であることが確認された。路面の幅は1.5～4.0 m、厚さは0.1～0.4 m、西側溝の検出長は南北約31.0 mを測り、幅は1.5～3.3 m、路面上面からの深さは0.7 m前後を測る。

右京五条二坊五町跡の調査(2)では、西堀川流路、西堀川小路の東路面、東側溝、内溝が検出されている。西堀川流路は南北長11.0 m分を検出し、幅14.8 m、深さ0.6～0.8 mを測るが、川底に打ち込まれた杭列の位置から、開削当初の川幅は約6.0 m(二丈)であったと推定される。西堀川小路東路面は南北長10.0 m分を検出し、幅5.7 m、東側溝は南北長10.0 m分を検出し、幅1.8～2.1 mで深さ0.5 mを測る。東築地については明確な痕跡は認められなかったが、東側溝東肩から内溝西肩までの間が僅かに盛り上がり、両者間の距離は約2.4 m、内溝は幅1.5 m、深さは0.3 mを測る。また、検出された西堀川と東築地との心-心距離が約12.0 mの規模となることから、西堀川小路の幅が24.0 m(八丈)であったことが確認された。

右京六条二坊六・十一町跡の調査(45)では、西側に設定された1区において西堀川流路、西堀川小路の東道路、東側溝、東築地、内溝と考えられる南北溝が検出されている。西堀川流路は南北約25.0 m分が検出され、幅約14.0～16.0 m、深さ約1.1 mを測る。東肩はほぼ推定位置で検出されたのに対し、西肩は西側に大きく拡がり、部分的に西築地推定位置を越える。また、東岸の川底部では杭および杭抜き取り穴列が数条検出された。西堀川小路東道路は、西堀川流路と西堀川小路東側溝間の平坦面で、幅は約6.0 m、路面敷は残存していなかった。東側溝は幅約2.0 m、深さ0.2 mで、上部が削平されていると考えられる。東築地は南北柱穴列で、掘形径は約0.5 m、柱間は北から3.9 m、4.9 m、内溝は幅約1.3 m、深さ0.1 mを測る。

右京七条二坊七町跡の調査(36)では、平安時代後期から近世にかけて幾重にも堆積する西堀川流路、西堀川小路の東側溝および東築地と考えられる溝と柱穴列が検出されている。東側溝と考えられる溝は幅1.2 m、深さ0.1 mを測る。

右京五・六条二坊跡の立会調査(41)では、複数の地点で西堀川流路および西堀川小路の道路側溝と考えられる遺構が検出されている。五条二坊七・十町跡(五条坊門小路付近)では西堀川流路の東西両肩、西堀川小路の東側溝と推定される溝が検出された。西堀川流路は幅15.6 m、深さ0.6 mで、東肩部では杭が打ち込まれていた。東側溝は幅1.3 mを測る。五条二坊六・十一町跡では西堀川流路、西堀川小路の東側溝と推定される溝が検出された。西堀川流路は幅11.3 m、深さ0.5 mを測り、東肩部には杭が打ち込まれていた。東側溝は幅0.5 m、深さ0.15 m、上部が11世紀代の遺物を包含する溝に切られる。五条二坊五・十二町跡(高辻小路付近)では、西堀川流路と西堀川小路の東側溝が検出されている。西堀川流路は幅14.9 m、川底は地表下1.1～1.4 mで確認されたが、東部では西部に比して0.1～0.2 m深くなる。東側溝は幅1.0 m、深さ0.3 mを測る。

六条二坊七町跡では西堀川流路の東肩が検出されている。

註

- (1) 平尾政幸・辻 純一 「右京三条二坊」『昭和 57 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1984 年
- (2) 高橋 潔・モンベティ恭代 「平安京右京二条二坊十一町・西堀川小路跡、御土居跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告書 2012-25』 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2014 年
- (3) 布川豊治 「平安京右京四条二坊十一町・西堀川小路跡、御土居跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告書 2015-1』 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2015 年

参考文献

財団法人 古代学協会・古代学研究所編 『平安京提要』 角川書店 1994 年

表1 既往調査一覧

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
1	右京五条一坊十三町	発掘	平安時代～鎌倉時代の土坑6基、江戸時代の溝、土坑5基を検出	「平安京右京五条一坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概用』1991 埋文研
2	右京五条二坊五町	発掘	平安時代の西堀川流路、東側溝、路面、築地跡、内溝、木棺墓、土坑、土坑墓を検出。	「平安京五条二坊」『平安京発掘調査報告 昭和55年度』1981 京都市埋蔵文化財調査センター
3	右京六条一坊十一・十四町	発掘	縄文時代～古墳時代以前の河流路、古墳時代の河流路、平安時代の建物、柵、井戸、土坑、河流路跡、鎌倉時代の西櫛司小路西側溝、近世以降の暗渠、競馬場濠を検出。	「平安京右京六条一坊」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概用』1997 埋文研
4	右京六条一坊十二・十三町、七条一坊十六町	発掘	弥生時代～古墳時代の湿地、平安時代の柱穴2基、平安時代後期の六条大路北側溝、江戸時代の土取穴、暗渠を検出。	「平安京右京六・七条一坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概用』1994 埋文研
5	右京六条一坊十二・十三町	発掘	平安時代の柱穴、井戸、平安時代～近代の溝、土坑、十二町で7群の建物、十三町で3群の建物、井戸、西櫛司小路東側溝、門跡を検出。	「平安京右京六条一坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概用』1994 埋文研
6	右京六条一坊十三町	発掘	縄文時代～弥生時代の旧流路、平安時代の掘立柱建物8棟、柵、溝、井戸、湿地状遺構、近世以降の暗渠、土坑を検出。	「平安京右京六条一坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概用』1995 埋文研
7	右京六条一坊十三・十四町	発掘	縄文時代～弥生時代の河流路、古墳時代の河流路、平安時代の掘立柱建物、揚梅小路路面、側溝、土坑、門跡？を検出。	「平安京右京六条一坊」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概用』1995 埋文研
8	右京六条一坊十三町	発掘	平安時代の建物、溝、池、近世以降の暗渠、土取穴、競馬場濠を検出。	「平安京右京六条一坊」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概用』1998 埋文研
9	右京六条一坊十四町	発掘	古墳時代～平安時代後期の河流路、平安時代前期の掘立柱建物、井戸、溝、柵、近世以降の土坑、溝を検出。	「平安京右京六条一坊」『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概用』1996 埋文研
10	右京六条二坊二町	発掘	弥生時代の溝、平安時代前期の掘立柱建物4棟、南北溝2条、井戸1基、土坑1基、中世の建物1棟以上、東西溝1条を検出。	「平安京右京六条二坊1」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概用』1993 埋文研
11a	右京六条一坊十四町	試掘	地表下1.45mで地山の黄褐色砂礫を検出。当該砂礫層直上まで現代盛土層。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成18年度』2007 京都市文化市民局
11b	右京六条二坊三町	試掘	地表下1.6mまで既存建物の基礎による攪乱。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成18年度』2007 京都市文化市民局
11c	右京六条二坊六町	試掘	平安時代の東西溝、土器埋納遺構、中世の南北溝を検出。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成18年度』2007 京都市文化市民局
11d	右京六条二坊十一町	試掘	地表下1.6mまで既存建物の影響により削平を受けていた。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成18年度』2007 京都市文化市民局
12	右京六条二坊三町	発掘	平安時代の池、溝、土坑、柱穴、室町時代～江戸時代の耕作溝、近代の耕作溝を検出。	「平安京右京六条二坊三町跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-25』2007 埋文研
13	右京六条二坊三町	立会	地表下1.8mで平安時代中期の包含層、1.35mで黄褐色砂礫の流れ堆積、1.6mで暗灰黄色砂礫の地山を検出。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』2007 京都市文化市民局
14	右京六条二坊四町	立会	地表下0.75mで平安時代前期～後期の流れ堆積を検出。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』1988 京都市文化観光局
15	右京六条二坊四町	試掘	地表下0.8mで平安時代後期の六条大路北側溝を検出。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』1990 京都市文化観光局
16	右京六条二坊五町	試掘	地表下0.8mでシルト層が全域に堆積することを確認、平安時代前期の土師器、瓦が出土。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』1989 京都市文化観光局
17	右京六条二坊五町	立会	No.1 地点第3、4層は平安時代の可能性が考えられる。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』1991 京都市文化観光局

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
18	右京六条二坊六町	立会	地表下 0.6 m で落込みを検出、平安時代の平瓦片、土師器微片が出土。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和 55 年度』 1981 京都市埋蔵文化財調査センター
19	右京六条二坊六町	試掘	地表下 1.5 m で平安時代前期の井戸を検出。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』 1990 京都市文化観光局
20	右京六条二坊六町	試掘	地表下 0.9 m で遺物包含層を検出。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 60 年度』 1986 京都市文化観光局
21	右京六条二坊七町	立会	湿地状堆積を検出、平安時代中期の土師器が出土。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』 1990 京都市文化観光局
22	右京六条二坊七町	試掘	西堀川の流路堆積を検出、平安時代の遺物が出土。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成 2 年度』 1991 京都市文化観光局
23	右京六条二坊七町	発掘	平安時代の西靱負小路側溝、土坑 1 基、近世の土坑 4 基を検出。	『史料京都の歴史 第 2 巻考古』 1983 平凡社
24	右京六条二坊八町	発掘	中世の遺物包含層を確認。	『史料京都の歴史 第 2 巻考古』 1983 平凡社
25	右京六条二坊八町	発掘	古墳時代の溝、平安時代中期？の包含層、室町時代の溝（西靱負小路側溝？）、柱穴、近世の包含層を検出。	『史料京都の歴史 第 2 巻考古』 1983 平凡社
26	右京六条二坊九町・十六町	立会	地表下 0.67 ～ 1.38 m で佐井川の堆積層を確認、平安時代前期の鉢片が出土。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報 平成 10 年度』 1999 京都市文化市民局
27	右京六条二坊十町	発掘	古墳時代の流路、平安時代前期～中期の掘立柱建物 6 棟以上、柵列 2 条、土坑、溝状遺構、鎌倉時代～室町時代の南北・東西小溝群を検出。	「平安京右京六条二坊」『昭和 62 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 1991 埋文研
28	右京六条二坊十町	立会	地表下 0.3 m で土坑 2 基を検出。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 62 年度』 1988 京都市文化観光局
29	右京六条二坊十一町	立会	溝状遺構を検出、淡黄灰色砂泥層より須恵器片が出土。	「調査概用一覧表」『京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和 56 年度』 1982 京都市文化観光局
30	右京六条二坊十二町	立会	野寺小路の両側溝、路面整地土を検出、平安時代後期の土師器、須恵器、瓦細片が出土。	「右京六条二坊十二・十三町」『京都市内遺跡立会調査概報 平成 9 年度』 1998 京都市文化市民局
31	右京六条二坊十五町	発掘	平安時代の道祖大路東築地、東側溝、道祖川流路、中世の溝、河流路を検出。	「平安京右京六条二坊 2」『昭和 63 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 1993 埋文研
32	右京七条一坊十四町	発掘	弥生時代の方形周溝墓、溝、平安時代の建物、井戸 3 基、溝を検出。	『平安京提要』 1994 角川書店
33	右京七条一坊十四町	発掘	平安時代の掘立柱建物、井戸、柵、溝、土坑を検出。	「平安京右京七条一坊」『平成 9 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 1999 埋文研
34	右京七条一坊一町	試掘	地表下 0.6 m で平安時代中期の包含層を確認。	「調査概用一覧表」『京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和 56 年度』 1982 京都市文化観光局
35	右京七条二坊二町・七町・十町	立会	地表下 0.4 m で平安時代の包含層を確認、土師器、須恵器が出土。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報 平成 10 年度』 1999 京都市文化市民局
36	右京七条二坊七町	発掘	平安時代中期～後期の溝（西堀川小路東側溝、東築地内溝）、柱穴、土坑、鎌倉時代～室町時代の溝、包含層、土坑、近代～現代の溝、柱穴、杭列、土坑を検出。	「右京七条二坊」『平安京発掘調査概報 昭和 58 年度』 1984 京都市文化観光局
37	右京七条二坊八町	発掘	平安時代中期の東西溝 1 条を検出。土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、瓦、古墳時代の土師器、須恵器が出土。	「右京七条二坊」『昭和 56 年度 京都市埋蔵文化財調査概用（発掘調査編）』 1983 埋文研
38	右京七条二坊十町	発掘	飛鳥時代～奈良時代の自然流路、平安時代前期の掘立柱建物 1 棟、柵 2 条、土坑、土坑状遺構、井戸、平安時代後期～鎌倉時代前期の東西・南北小溝群、鎌倉時代～室町時代の東西小溝群、桃山時代～江戸時代の東西小溝群を検出。	「平安京右京七条二坊」『平成 2 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 1994 埋文研

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
39	右京七条二坊十四町	立会	地表下 0.3 m で平安時代中期の包含層、0.9 m で湿地状堆積を確認、土師器、須恵器、黒色土器が出土。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報 平成 9 年度』1998 京都市文化市民局
40	右京七条二坊十五町	発掘	古墳時代の河流路 1 条、平安時代の掘立柱建物 6 棟、柵 1 条、井戸 1 基、溝 2 条、土坑、ピット、河流路 1 条、中世遺構の溝多数を検出。	「平安京右京七条二坊」『昭和 63 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1993 埋文研
41	右京五条・六条二坊	立会	平安時代以前の溝状遺構、平安時代の西鞠負小路西側溝、西堀川小路東側溝、土坑状遺構、平安時代前期～後期の西堀川小路、西堀川流路を検出。	「右京五条二坊・六条二坊」『昭和 56 年度 京都市埋蔵文化財調査概要（試掘・立会調査編）』1983 埋文研
42	右京五条・六条二坊	立会	弥生時代中期の包含層を確認、平安時代以降の道祖川流路を検出。	「右京五条二坊・六条二坊」『昭和 57 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1984 埋文研
43	右京六条二坊	立会	平安時代の遺物包含層を確認。	「昭和 59 年度試掘・立会調査一覧表」『昭和 59 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1987 埋文研
44	右京六条・七条二坊	立会	平安時代の井戸、平安時代～鎌倉時代の溝、近代の溝を検出。	「昭和 58 年度試掘・立会調査一覧表」『昭和 58 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1985 埋文研
45	右京六条二坊六町・十一町	発掘	弥生時代～古墳時代の落込み、溝、土坑、平安時代前期の西堀川小路東築地、東側溝、内溝、西堀川流路、掘立柱建物、柵、溝、井戸、土坑、室町時代の礫敷き遺構、畔、溝、土坑、江戸時代の溝、土坑を検出。	「平安京右京六条二坊六・十二町跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-3』2007 埋文研

埋文研→財団法人京都市埋蔵文化財研究所

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序（図版1～3）

調査地における現地表面の標高は、東区北東角付近に設置した基準点T.1で23.834m、東区南西部付近に設置したT.2で23.574m、西区北西角付近に設置した基準点T.3で23.614m、東区南東角部で23.770m、西区南西角部で23.470mであり、北東から南西に向かって低くなる地形を呈する。現地表面下0.3～0.9mは近現代の盛土および整地土で、層厚は西区から東区に向けて厚くなる。この近現代盛土・整地土直下に10YR4/1褐灰色シルト～極細粒砂からなる近世以降の耕作土層が堆積しており、層厚は0.1～0.2mである。当該層を除去すると鉄分およびマンガン分を含む10YR5/1褐灰色～10YR7/1灰白色シルト～極細粒砂からなる第1層に達し、層厚は0.2～0.4mを測る。当層は中世の遺物を包含しており、当該期の耕作土層と考えられる。第1層は東区のみで確認され、西区では近現代盛土・整地土、近世以降の耕作土層を除去した時点で10YR6/8明黄褐色シルト～極細粒砂からなる基盤層が露出する。東区においては、第1層直下に基盤層が堆積し、この層をベースとして西堀川が掘り込まれていた。調査は、東区については第1層上面を第1面、基盤層上面を第2面として設定し、西区については基盤層上面での1面調査を実施した。ただし、西区については同一面で中世の遺構と平安時代の遺構を検出したため、中世の遺構を第1面相当、平安時代の遺構を第2面相当の遺構として掘削、記録を実施した。

2 検出遺構

東区第1面で検出された遺構は主に上層から切り込まれた攪乱であるが、溝状遺構1基を検出した。第2面では、埋土中に平安時代（9～10世紀）の遺物を包含する西堀川の流路、当該流路と並行する南北溝2条を検出した。西区においては、上層から切り込まれた攪乱に加えて、東西、南北方向の耕作溝数条、平安時代（9～10世紀）の遺物を包含する井戸1基を検出した。

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
中世	溝状遺構 004・溝 006	
平安時代	河 001・溝 002・溝 003・井戸 015	

（1）東区第1面（図版5、13－2）

上層から切り込まれた多数の攪乱に加え、溝状遺構1基を検出した。

〔溝状遺構〕

溝状遺構004（図版5）

調査区北東部で検出した。幅約0.8mを測る東西方向の溝状遺構で、2.0m分を検出し、検出面から遺構底部までの深さは0.2mである。河001、溝003を切る。出土した遺物は極小片で図化できるものは出土していない。

(2) 東区第2面 (図版6、14-1)

南北方向に走る河001、溝002、溝003を検出した。

〔河〕

河001 (図版2、3、4、6、7、12、14-1)

東西幅9.7～10.4mの南北流路で、検出面から川底までの深さは0.8～1.0mを測り、南北長約13.0m分を検出した。東区内の大半を占め、西堀川流路と考えられる遺構である。既往の調査で検出されている西堀川流路遺構では、何れの地点においても護岸を目的とした杭列が検出されているが、当遺構では杭、杭跡ともに検出されなかった。

既往の調査地のうち、最も近接する六条二坊六町跡で検出された東肩部の杭列を今回調査地まで延長した際の想定ラインは、今回検出した東肩から西へ3.0～3.5mの位置にあたる (図版12参照)。東肩部の残存状況が良好であった既往の調査地における、杭列から検出流路上端までの距離は0.5～1.3mであることから、当調査地における西堀川の東肩は少なくとも2.0m前後広がっている可能性が考えられ、杭列が残存していなかったのはこのためと思われる。この東肩部杭列想定ラインを基準に既往の調査で確認されている川幅6.0mを復元すると、当遺構の西肩底部にほぼ一致し、西肩上端までの距離は約1.0mとなることから、当遺構の西肩は開削当初から大きく拡幅されていない可能性が高い。

遺構内埋土は大きく上下2層にわかれ、上層は褐灰色～黒色を呈するシルト～極細粒砂層で粘性を有し、下層は浅黄色あるいは明褐色～明赤褐色を呈する粗粒砂～礫層である。遺構埋土の断面観察から、東肩の補修ないし改修の痕跡と考えられる堆積が認められる (図版2-層番号9、11、17、19、20・図版3-層番号7～9、16、20) ことから、肩の崩落や流路の埋没と浚渫を繰り返していたと考えられる。また、河底の形状から、少なくとも2条の大きな川筋を確認することができた。これら2条の川筋には切り合い関係が認められ、東側が西側に切られることから、東側の川筋がより古い流路と考えられる。これらのことから、当調査地における西堀川は、当初は東肩の改修と流路の浚渫によって東側へ拡幅されたことが想定される。次に、ある程度東へ拡幅した流路が埋没した時点で流路を西側に移し、最終段階においては当調査で検出した流路の凡そ西半が機能していたと考えられる。遺構埋土には9世紀後半～10世紀前葉の遺物が主体的に包含されていたが、東西川筋の埋土に包含される遺物に明確な時期差が認められないことから、両者の埋没時期には大きな隔たりは無く、西堀川の水流通が停滞し始めてから完全に埋没するまで然程の期間を要しなかったことが窺われる。また、西堀川流路跡埋土の直下は7.5YR5/8明褐色粗粒砂～礫からなる基盤層が堆積しており、当該層には流木が多数包含されていた。これらの流木について、放射性炭素年代測定を実施し、縄文時代前期後半に比定されるとの結果を得たことから、上記基盤層は当該期に形成された堆積層と推定される。このことから、当調査地における西堀川が平安時代以前の自然河川流路跡上あるいは洪水堆積層上に開削されたと考えられる。1981年～1982年にかけて五・六条二坊で実施された立会調査においても、右京五条二坊六町跡で西堀川小路東側溝の東部に広がる平安時代の遺物包含層下層に流木が包含されており、平安京以前の自然流路と考えられること

から、平安京造営以前の旧流路上に西堀川が造成されていることが指摘されている。

溝002（図版2、3、4、6、8、14－1）

河001の西側を並行して走る南北方向の溝で、幅3.6～4.3m、長さ約13.0m分を検出した。河001西肩から当遺構東肩までの距離は1.3～2.1mを測る。検出面からの深さ約0.3mで、中央東寄り部が幅0.9mの溝状に深くなり、南北中央部で溝002検出面からの深さ0.6mを測るが、南北へ向かって浅くなり、調査区北壁際で約0.1m、南壁際で約0.2mとなる。また、この溝状の窪みの東肩は、西堀川小路西築地心の想定ラインから北壁際で5.0m、南壁際で4.0m東に位置する。想定位置に比して1.0～2.0m東ではあるが、西堀川小路西側溝の可能性が考えられる。何れにしても、当遺構は西堀川小路の西側道路および西側溝の想定位置で検出されていることから、元来は道路および側溝であった場所を流路化したものと考えられる。また、当遺構の埋土は河001上層埋土とほぼ同じであり、9世紀後半～10世紀前葉の遺物が包含されていた。これらのことから、当遺構の埋没時期は河001とほぼ同時期と考えられる。

溝003（図版2、3、4、6、7、14－1）

河001の東側をほぼ並行に走る南北溝である。幅0.8～1.0m、長さ約13.0m分を検出した。検出面から遺構底部までの深さは0.2～0.3mを測り、北から南へ向かって深くなっている。埋土中に包含されていた遺物は極小片であったため、時期は判然としないが、西肩が河001の東肩を部分的に切ることから、当遺構よりも河001が先行すると考えられる。

（3）西区（図版5、6、14－2）

東区で検出した第1層は確認されず、近現代盛土・整地土および近世以降の耕作土層を除去した時点で基盤層に達する。基盤層上で上層から切り込まれた攪乱多数、中世の耕作溝、埋土に平安時代の遺物を包含する井戸1基を検出した。

〔中世の遺構〕

〔耕作溝〕

東西・南北方向の溝を数条検出した。幅は0.3～0.5m、検出面から遺構底部までの深さは0.1m前後である。

〔溝〕

溝006（図版5）

調査区東端部で検出した南北方向の溝で、幅0.4～0.7m、検出長は約13.0m、検出面から遺構底部までの深さは0.15mを測る。埋土中に包含されていた遺物は小片のみであり、図示できるものはなかったが、13世紀の所産と考えられる遺物が含まれていた。また、当溝はほぼ西堀川小路西築地心想定位置に当たることから、西堀川小路が機能していた時期からの地区割りをの中世におい

でもある程度踏襲していた可能性が考えられる。

〔平安時代の遺構〕

〔井戸〕

井戸015（図版6、9、15）

調査区南部の中央付近で検出した。掘方は一辺3.1mの方形で、一辺約1.2mの方形木製井戸枠を有する。掘方検出面から約0.5m掘削したところで井戸枠を検出し、井戸底部までの深さは枠検出面から約1.5mを測る。井戸枠の構造は、組立式方形縦板組支柱横棧留型である。横棧は三段分が残存しており、各段の間隔は、底部のものを一段目として、一段目から二段目までは0.7m、二段目から三段目までは0.6mを測る。横棧は北辺および南辺の両端を凹形、東辺および西辺の両端を凸形に作り出し、四隅の仕口は三枚柄組で組み合わされていた。枠内底部には集水施設や浄水施設は残存していなかった。また、掘方検出面において井屋と考えられる柱穴は検出されなかった。枠内埋土には9世紀後半～10世紀前葉の遺物が包含されていた。

3 出土遺物（図版10、11）

遺物はコンテナで9箱分が出土した。土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器が主で、他に青白磁、瓦質土器、瓦器、瓦、木製品が出土している。また、東区第1面で検出した溝状遺構004、第2面で検出した溝003、西区で検出した溝006から出土した遺物は極小片のみで、図化が可能なものはなかった。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ数	A ランク点数	B ランク 点数	C ランク 箱数
弥生時代	石器			石製品1点	
平安時代前期 ～ 中期	土師器、須恵器、緑釉陶器、 灰釉陶器、青磁、白磁、瓦、 木製品		土師器7点、須恵器13点、 緑釉陶器11点、灰釉陶器 11点、青磁3点、白磁1点、 瓦5点、木製品3点	須恵器1点	
平安時代末期 ～ 鎌倉時代	土師器、瓦質土器、瓦器		土師器1点、瓦質土器1点、 瓦器1点	土師器2点	
合計		13箱	57点（3箱）	4点（1箱）	9箱

*コンテナ箱数は、整理段階で4箱増加した。

（1）東区第1層出土遺物

東区第1層に包含されていた遺物は13世紀の所産と考えられるものが主体をなすが、9世紀の遺物が少量混入している。

1は須恵器壺で、体部下半から底部が残存しており、底径4.4cm、残存器高4.4cm、平坦な底部から内湾しながら外方へ体部が立ち上がる。底部には回転糸切り痕が認められ、体部はロクロナデで成形される。9世紀後半の所産と考えられる。

2は土師器皿である。口径12.4cm、器高2.0cm、平坦な底部から体部が外方へ直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。底部外面にオサエの痕跡が残り、体部外面から見込み部にかけてヨコナデが施される。6A～B段階に属し、12世紀末～13世紀の所産と考えられる。

3は瓦器碗である。口径11.8cm、器高2.9cm、平坦な底部から体部が外方へ直線的に立ち上がり、口縁部は直立し、口縁短部は丸く収められる。底部外面から体部外面にかけてナデ、口縁部にナデ、見込み部にミガキが施される。体部外面に工具による直線状の圧痕が認められ、輪花碗と考えられる。13世紀中葉の所産と考えられる。

4は瓦質土器の羽釜で、残存器高は3.2cm。口縁部のみ残存しているが、小片のため、口径を復元することができなかった。口縁端部は平坦で外傾する。

(2) 東区第2面遺構出土遺物

東区第2面で検出された遺構からは、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器に加えて瓦、青磁、白磁が少量出土している。

〔河〕

河001

当遺構の埋土は上層と下層の2層に分かれ、5～17は上層、18～42は下層から出土している。主に須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器が出土しており、9世紀後半～10世前葉の所産と考えられるものが主体をなす。これらに加えて10世紀代の所産と考えられる土師器、8世紀後半～9世紀代の所産と考えられる須恵器、9世紀代の軒平瓦が出土している。

河001 上層出土遺物

5は土師器皿Aである。口径9.4cm、器高1.0cm、体部は外反しながら外方へ立ち上がり、口縁部が強く屈曲し、口縁端部は突起状に成形される。底部外面にオサエの痕跡が残り、体部外面から見込み部にヨコナデが施される。3B段階に属し、10世紀中頃の所産と考えられる。6は土師器高杯で、脚部が残存している。残存器高は13.6cmで、ケズリによって9面が作り出される。2C～3A段階に属し、10世紀前半の所産と考えられる。7は土師器甕で、口縁部のみ残存しており、口径21.6cm、残存器高3.9cmである。体部は肩部で内湾し、口縁部で強く外反して外方へ伸び、口縁端部は丸く収められる。体部内外面にナデ、口縁部内外面にヨコナデが施される。3A段階に属し、10世紀前半の所産と考えられる。

8は須恵器杯Bである。底径10.9cm、残存器高2.3cm、口縁部を欠損している。体部は直線的にやや外方へ立ち上がり、高台は体部立ち上がり部よりやや内側に貼り付けられ、外方へ向かって伸びる。端部は平坦で、断面形は長方形を呈する。底部外面に回転ケズリのちナデ、体部内外面にロクロナデを施す。8世紀後半～9世紀初めの所産と考えられる。

9は須恵器碗と考えられる。口縁部のみ残存している。10は須恵器壺で、底径9.4cm、残存器高3.6cm、体部の大半と口縁部を欠損している。体部は内湾しながら外方へ立ち上がり、高台は貼り付けで端部が平坦に成形され、断面形は踏ん張る形状を呈する。9世紀前葉～中葉の所産と考えら

れる。11は須恵器鉢で、底径7.0cm、残存器高3.7cm、底部は平坦で糸切り痕が残る。体部はやや内湾しながら外方へ立ち上がり、内外面にロクロナデが施される。10世紀前半の所産と考えられる。

12は灰釉陶器碗である。底径7.4cm、残存器高1.7cm、体部の大半および口縁部を欠損している。高台は貼り付けで、外方へ伸び、端部は平坦であるが、接地面は尖り気味である。9世紀後半～10世紀前葉の所産と考えられる。

13は灰釉陶器皿である。底径6.6cm、残存器高1.6cm、体部の大半および口縁部を欠損している。底部は貼り付けの輪高台で、外方へ向かって伸び、端部は平坦で断面は長方形を呈する。9世紀後半の所産と考えられる。

14は緑釉陶器で、碗と考えられる。底部のみ残存しており、底径8.0cm、残存器高1.7cm。高台は削り出しの平高台で、見込み部に沈線が1条認められる。9世紀後半～10世紀前葉の所産と考えられる。

15は青磁碗である。底径5.4cm、残存器高2.4cm、体部上半および口縁部を欠損している。高台は削り出しの平高台と考えられる。9世紀後半～10世紀前葉の所産と考えられる。

16は白磁碗である。底径5.9cm、残存器高3.0cm、高台は削り出しの輪高台で、体部は内湾気味に外方へ立ち上がる。見込み部に沈線1条が施される。10世紀代の所産と考えられる。

17は均整唐草文軒平瓦である。残存長14.2cm、残存幅19.6cm、瓦当厚6.3cm。唐草は中心飾りから左右に三回反転する。唐草文の周囲に圈線が巡り、内区と上下外区、脇区を区画し、上下外区および脇区には珠文が配される。瓦当下縁部に横方向のケズリ、顎部～平瓦部凸面側に掛けて縦方向のケズリを施す。瓦当上縁部に横方向のケズリで面取りを施し、平瓦部凹面側には布目圧痕を残す。9世紀の所産と考えられる。

河001下層出土遺物

18、19は土師器皿Aである。18は残存器高1.7cm。2C～3A段階に属し、10世紀前半の所産と考えられる。19は残存器高1.3cm、体部は内湾気味に外方へ立ち上がり、口縁部で屈曲して外反し、口縁端部は直立して丸く収められる。2C～3A段階に属し、10世紀前半の所産と考えられる。

20は須恵器で、鉢と考えられる。底径15.0cm、残存器高7.6cm、底部は平坦で、外端部に高台が貼り付けられ、体部が直線的に外方へ立ち上がる。高台はほぼ直立し、端部は平坦で、断面は長方形を呈する。体部外面は摩滅により調整不明、内面にはロクロナデが施される。9世紀中葉の所産と考えられる。21は須恵器鉢である。口径19.2cm、残存器高4.9cm、体部は外方へ立ち上がり、強く屈曲して口縁部は直立する。口縁端部は断面がT字形を呈する。体部および口縁部の内外面にロクロナデが施される。9世紀後半～10世紀前葉の所産と考えられる。

22、23は須恵器壺である。22は底径10.8cm、残存器高6.7cm、体部の大半と口縁部を欠損する。底部は平坦で輪高台を貼り付け、体部は内湾気味に外方へ立ち上がる。体部外面に回転ケズリ、体部内面にロクロナデを施す。高台は外方へ伸び、端部は平坦で、断面は踏ん張る形状を呈する。8

世紀末～9世紀初頭の所産と考えられる。23は底径3.8cm、残存器高3.4cm、体部上半と口縁部を欠損する。底部は平坦で、体部は内湾気味に立ち上がる。体部内外面にロクロナデを施す。9世紀後半の所産と考えられる。24は須恵器壺と考えられる。底径12.4cm、残存器高9.3cm、底部は平坦で、体部はほぼ直立する。体部外面下端部にケズリ、体部内外面にロクロナデを施す。9世紀前半の所産と考えられる。

25は須恵器平瓶あるいは長頸壺の体部片と考えられる。底部は欠損しており、体部上半～肩部が残存している。肩部の径は22.0cm、残存器高4.9cm、肩部で強く屈曲して稜を持ち、直線的に内方へ伸びる。外面にロクロナデの痕跡が認められる。8世紀末～9世紀の所産か。

26～29は灰釉陶器碗である。26は底径7.6cm、残存器高2.2cm、体部の大半と口縁部を欠損する。底部は糸切り後に輪高台を貼り付け、体部は内湾しながら外方へ立ち上がる。高台は外方へ伸びてやや高く、端部は丸く仕上げられ、断面はU字形を呈する。9世紀後半の所産と考えられる。27は底径7.0cm、残存器高2.5cm、体部は内湾しながら外方へ立ち上がり、底部は糸切り後に輪高台が貼り付けられる。9世紀後半～10世紀前葉の所産と考えられる。28は灰釉陶器皿である。底径7.2cm、器高2.1cm、体部の上半と口縁部を欠損する。底部は糸切り後に輪高台を貼り付ける。高台は外方へ伸びて端部は丸みを帯び、断面はU字形を呈する。9世紀後半～10世紀前葉の所産と考えられる。29は灰釉陶器である。底径17.0cm、残存器高2.8cm、底部は平坦で、切り離し痕はナデ消される。外端部に削り出しによって極低い高台が成形され、体部は内湾気味に外方へ立ち上がる。

30は緑釉陶器碗である。底径6.1cm、残存器高2.1cm、体部上半と口縁部を欠損する。底部は削り出しの平高台で、体部は内湾しながら外方へ立ち上がる。9世紀後半の所産と考えられる。

31～35は緑釉陶器皿である。31は底径6.5cm、残存器高1.7cm、体部の大半と口縁部を欠損する。底部は削り出しの蛇の目高台で、体部は直線的に外方へ立ち上がる。見込み部に浅い沈線1条が認められる。9世紀後半～10世紀前葉の所産と考えられる。32は底径6.4cm、残存器高1.9cm、口縁部は残存していない。底部は削り出しの蛇の目高台で、体部は内湾しながら外方へ立ち上がる。9世紀後半～10世紀前葉の所産と考えられる。33は底径6.5cm、残存器高1.7cm、底部は削り出しの輪高台で、端部は平坦に仕上げられ、断面は長方形を呈する。見込み部から底部内面にかけて陰刻が施される。9世紀後半～10世紀前葉の所産と考えられる。34は口径14.9cm、底径6.9cm、器高3.2cm、底部は削り出しの輪高台で、体部は内湾しながら外方へ立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。高台は外方へ伸び、端部は平坦で断面は長方形を呈する。口縁部外面、底部内面に沈線各1条が認められる。9世紀後半～10世紀前葉の所産と考えられる。35は底径7.0cm、残存器高1.3cm、底部は削り出しの輪高台で、体部は内湾気味に立ち上がり、見込み部に沈線1条が認められる。高台は端部が平坦に仕上げられ、断面は長方形を呈する。9世紀後半～10世紀前葉の所産と考えられる。

36、37は青磁碗である。36は底径6.0cm、残存器高2.9cm、体部の上半および口縁部を欠損している。底部は削り出しの平高台で、体部は直線的に外方へ立ち上がる。9世紀後半の所産と考えら

れる。37は底径6.2cm、残存器高2.4cm、体部の上半および口縁部を欠損している。底部は削り出しの蛇の目高台で、体部は直線的に外方へ立ち上がる。9世紀後半～10世紀前葉の所産と考えられる。

38～40は軒平瓦である。38は残存長13.5cm、残存幅9.3cm、瓦当厚5.3cm、中心飾りおよび左右の第一主葉が残存しており、均整唐草文と考えられる。唐草の周囲に太い圈線を巡らせ、内区と上下外区を区画するが、瓦当端部を欠損するため、脇区の有無は不明である。上下外区に大振りな珠文を配する。顎部から平瓦部凸面側にかけて縦方向のケズリが施され、平瓦部凹面側には布目圧痕が残る。9世紀の所産と考えられる。39は均整唐草文軒平瓦で、40と同範である。残存長18.0cm、残存幅21.5cm、瓦当厚6.9cm、対向C字形の中心飾りから左右に三回反転するが、左半を欠損する。唐草の周囲に圈線を巡らせ、内区と上下外区、脇区を区画し、上下外区および脇区には大ぶりの珠文を配する。顎部には縦方向のケズリののちに横方向のナデ、平瓦部凸面側に縦方向のケズリを施し、瓦当上縁の約5.0mmを横方向のケズリで浅く面取りし、平瓦部凹面側の瓦当面から約7.5cmまでの範囲にケズリを施すが、それ以降は無調整で布目圧痕を残す。9世紀の所産と考えられる。40は均整唐草文軒平瓦で、39と同範である。残存長18.1cm、残存幅19.7cm、瓦当厚6.8cm、対向C字形の中心飾りから左右に三回反転するが、右半を欠損する。顎部に横方向のケズリを施し、顎部後縁部を横方向のケズリによって浅く面取りし、平瓦部凸面側は縦方向のケズリによって叩き痕を残さない。平瓦部凹面側は、瓦当面から約3.0cmの範囲に横方向のケズリを施す以外は無調整で、布目圧痕を残す。9世紀の所産と考えられる。

41は埴である。残存長26.3cm、残存幅14.0cm、厚さ8.6cm、全面にナデを施すが、部分的に工具痕跡が残る。

〔溝〕

溝002

8世紀末～9世紀代の所産と考えられる須恵器、9世紀後半の所産と考えられる灰釉陶器が出土している。

42は須恵器杯Bである。底径8.0cm、残存器高1.8cm、体部の大半と口縁部を欠損している。体部は内湾気味に外方へ立ち上がり、体部内外面にロクロナデが施される。高台は底部端に貼り付けられ、端面は平坦で長方形の断面形を呈する。8世紀末～9世紀初めの所産と考えられる。

43は須恵器壺である。底径12.6cm、残存器高3.2cm、体部の大半と口縁部を欠損している。体部は直線的に外方へ立ち上がる。貼付け高台は端面が平坦で、断面形は踏ん張る形状を呈する。9世紀前葉～中葉の所産と考えられる。

44は灰釉陶器の段皿である。口径18.2cm、底径8.1cm、器高3.6cm。高台は貼付けの輪高台で、やや外方へ向かって伸び、端部は丸みを帯びる。体部は内湾気味に外方へ立ち上がり、口縁部は直線的に伸びて端部が丸く収められる。底部外面には糸切り痕が認められ、体部外面に回転ケズリのちナデ、口縁部外面から底部内面にかけてロクロナデが施される。口縁端部から底部内面にかけて

施釉が認められる。9世紀後半の所産と考えられる。

（3）西区遺構出土遺物

西区で検出された遺構のうち、溝006から出土した遺物は小片が大半であり、図化が可能なものは出土していない。また、井戸015から出土した遺物は、2B～2C段階に属し、9世紀後半～10世紀前葉に比定されるものが主体をなす。

〔井戸〕

井戸015

45～49は掘方最上層、50～57は井戸枠内から出土した。

45、46は灰釉陶器碗である。45は底径8.5cm、残存器高3.0cm、底部は貼り付けの輪高台で、やや高く、外方へ伸びる。端部は丸く仕上げられ、断面はU字形を呈する。体部は内湾しながら外方へ伸びる。9世紀後半の所産と考えられる。46は底径5.8cm、残存器高1.9cm、底部は貼り付けの輪高台で、端部は平坦で内傾し、断面は台形を呈する。9世紀後半の所産と考えられる。

47は灰釉陶器で、底部のみ残存しており、体部の大半を欠損している。底径14.1cm、残存器高3.9cm、底部は貼り付けの輪高台である。高台は高く、外方へ伸び、端部は平坦で、断面は長方形を呈する。体部は内湾気味に立ち上がる。10世紀中葉の所産と考えられる。

48は緑釉陶器碗と考えられる。底径8.0cm、残存器高2.6cm、底部は削り出しの輪高台で、端部は平坦に仕上げられ、断面は長方形を呈する。体部は内湾しながら外方へ立ち上がる。9世紀後半の所産と考えられる。49は緑釉陶器碗である。底径7.2cm、残存器高1.9cm、底部は糸切り後に高台が貼り付けられる。体部は内湾しながら外方へ立ち上がり、見込み部に沈線1条が認められる。9世紀後半～10世紀前葉の所産と考えられる。

50、51は土師器皿Aである。50は口径13.4cm、器高1.7cm、底部は平坦で、体部は内湾しながら外方へ立ち上がり、口縁部で屈曲して外反する。口縁端部は直立して丸く収められる。底部外面から体部外面にオサエの痕跡が残り、口縁部外面から見込み部にかけてヨコナデ、底部内面にハケが施される。2B～2C段階に属し、9世紀後半～10世紀前葉の所産と考えられる。51は残存器高1.5cm、体部は内湾気味に外方へ立ち上がり、口縁部でやや屈曲して外反し、口縁端部は丸く収められる。体部外面にオサエの痕跡が残り、口縁部外面から見込み部にかけてヨコナデ、底部内面にハケが施される。2B～2C段階に属し、9世紀後半～10世紀前葉の所産と考えられる。

52は灰釉陶器碗である。底径7.8cm、残存器高2.7cm、底部は貼り付けの三日月高台である。高台は高く、やや外方へ伸び、端部は平坦に仕上げられ、断面は長方形を呈する。体部は内湾しながら外方へ立ち上がる。9世紀後半～10世紀前葉の所産と考えられる。

53、54は緑釉陶器皿である。53は底径7.6cm、残存器高1.5cm、体部は内湾気味に外方へ立ち上がる。底部には、蛇の目高台が貼り付けられ、端部は平坦で、断面は丸みを帯びた長方形を呈する。9世紀後半の所産と考えられる。54は底径7.7cm、残存器高1.4cm、底部は貼り付けの輪高台で、端部は平坦に仕上げられ、断面はやや踏ん張る形状を呈する。10世紀前葉の所産と考えられる。

55～57は木製品である。55は曲げ物で、直径17.4cm、器高13.0cmである。56は用途不明の木製品である。残存長13.9cm、幅1.3cm、厚さ0.2cm、下端部近くに径約0.2cmの穿孔が認められる。57は斎串で、全長14.3cm、最大幅1.7cm、厚さ0.2cmである。

第Ⅳ章 まとめ

今回の調査では、東区第1面においては上層から切り込まれた近代以降の攪乱が主に検出され、遺構は溝状遺構004のみであった。第1面のベース層である第1層中には13世紀の所産と考えられる遺物が包含されており、中世の耕作土層と考えられる。東区第2面においては、主な遺構として埋土中に平安時代前期～中期の遺物を包含する西堀川流路跡（河001）、西堀川小路西側道路および西側溝が流路化したものと考えられる溝002を検出した。西区においては、近現代盛土・整地土および近世以降の耕作土層を除去した時点で10YR6/8明黄褐色シルト～極細粒砂からなる基盤層に達し、東区第1層に相当する堆積層は確認されなかった。一方で、基盤層上で南北および東西方向の耕作溝が数条検出され、これらの溝は下記の井戸を切っている。また、河001と同時期のものと考えられる井戸1基を検出したが、柱穴等は検出されず、後世の削平によって掘削深度の深い井戸が残存したと思われる。

西堀川流路跡（河001）は東西両肩を検出したが、既往の調査において肩部で検出されている杭列は検出されず、杭を伴う護岸がなされていたかは不明である。遺構の断面観察から河001は、肩部の改修や浚渫を複数回にわたって受けていることが推定されることから、それらの工事あるいは水流の浸食によって開削当初の護岸杭が失われていたとも考えられる。

また、河001の上端での検出幅は約10.0mを測り、東肩は近接する六条二坊六・十一町跡で検出された西堀川流路跡東肩部杭列を当調査地まで延長した想定ラインから東へ3.0～3.5mの位置にあたる。東肩部の残存状況が良好であった既往の調査地における、杭列から検出流路上端までの距離は0.5～1.3mであることから、河001の東肩は少なくとも2.0m前後広がっている可能性が考えられる。この東肩部杭列想定ラインを基準に既往の調査で確認されている川幅6.0mを復元すると、当遺構の西肩底部にはほぼ一致し、西肩上端までの距離は約1.0mとなることから、当遺構の西肩は開削当初から大きく拡幅されていないと思われる。

河001の埋土は上下2層に分かれ、上層は褐灰色～黒色を呈するシルト～極細粒砂層で粘性を有し、下層は浅黄色あるいは明褐色～明赤褐色を呈する粗粒砂～礫層で、9世紀後半～10世紀前葉の所産と考えられる遺物が主に包含されていた。また、河001の断面観察では、開削後に東肩の崩落と修復、河底の浚渫を繰り返すことによって流路が東へ拡大し、ある程度東側へ拡幅された時点で流路を西側に移したと考えられる。また、河001の西を並行する溝002は西堀川小路西側路面および西側溝が流路化したものと考えられ、両遺構が一体化した流路を形成していたと仮定すれば、西堀川流路西肩が大きく西へ拡大していたと看做すことも可能であろう。西堀川流路跡の西肩については、二条二坊十一町跡、三条二坊十町跡、四条二坊十一町跡での検出例では西へ大きくは広がっていないのに対し、五条二坊五町跡、六条二坊六・十町跡では川幅が西へ大幅に拡大しており、六条二坊六・十町跡では西築地想定位置を越えることが確認されている。今回調査地においては、河001の西肩は開削時から大きくは変わっていないと思われる一方で、溝002が西堀川小路西側道路および西側溝の想定位置で検出されており、西堀川が機能していた最終段階の時点では西

側道路および西側溝が流路化していたと考えられ、川幅が西へ拡大していたと看做すことができよう。これらのことから、四条二坊十一町跡から五条二坊五町跡に至る何れかの地点で西へ川幅が拡大し始めることが想定されるが、現時点では発掘調査によってその地点は判明していない。三条二坊十町跡、四条二坊十一町跡、五条二坊五町跡、六条二坊六・十二町跡および今回調査地での調査区および現地表面での三条から六条までの等高線図をプロットしてみると（図版12）、三条大路より北はほぼ南北方向の谷地形になっているのに対し、四条大路付近では北東から南西方向の傾斜が、五条大路付近から南は同方向の谷地形が認められる。このことから、三条大路付近以北は開削当初の流路両肩を大きく浸食することなく、あるいは両肩を均等に浸食しながら直線的に南流し、四条大路付近から西肩を浸食して川幅を西へ拡大させながら流下したことが想定される。但し、図示した等高線図はあくまで現地表面におけるものであり、必ずしも平安時代の地形を反映しているとは限らないが、既往の調査および今調査で検出された西堀川流路跡の様相と符号するものといえよう。

埋没時期については、河001および溝002の埋土に包含されていた遺物が8世紀末～9世紀の須恵器を含むものの、9世紀後半～10世紀前葉に比定されるものが主体的であることから、10世紀前半には埋没し、水流が途絶えていたと考えられる。また、溝002は西堀川小路西側道路および西側溝が想定される位置にあたることから、河001が機能を喪失した時期には、西堀川小路西側道路や西側溝も埋没したと考えられる。

また、西堀川流路跡下の基盤層に多数の流木が包含されており、縄文時代前期後半に比定されることから、当該期に西堀川流路跡のベース層が形成されたと推定される。1981年から1982年にかけて五・六条二坊跡で実施された立会調査においても、右京五条二坊六町跡で西堀川小路東側溝の東部に広がる平安時代の遺物包含層下層に流木が包含されていたことから、平安京造営以前の旧流路上に西堀川が造成されていることが指摘されている。一方で、今回調査では旧流路の肩は検出されていないことから、当調査地の基盤層が自然流路の堆積層であると断定することはできず、近辺を流れる自然流路からの洪水堆積層である可能性も考えられる。

西区は西堀川小路以西の宅地想定位置にあたるが、建物跡は検出されず、井戸1基（井戸015）のみが検出された。当井戸は掘方が一辺3.1m、検出面から底部までの深さ約2.0mを測る。一辺約1.2mの木製井戸枠を有し、その構造は組立式方形縦板組支柱横棧留型であった。当井戸の埋土内には9世紀後半～10世紀前葉の所産と考えられる遺物が包含されており、河001、溝002の遺物と同時期のものであることから、西堀川の埋没に伴い、西堀川小路西側の宅地も廃絶したと考えられる。平安時代前～中期に機能したと考えられる井戸が検出されたことは、当調査地周辺が西堀川の開削、西堀川小路の敷設と共に宅地として整備、開発がなされ、利用されていたことを示唆するものであろう。井戸以外の遺構が検出されなかったことについては、西堀川および西堀川小路、小路西側の宅地が廃絶した後に耕作地化される過程で削平を受け、掘削深度の深い井戸のみが残存したためと思われる。西堀川、西堀川小路、小路西側宅地が廃絶した後は湿地状になっていたと想定され、東区第1層に包含されていた遺物から、遅くとも12世紀末～13世紀には耕地化されていた

ものと考えられる。

西堀川は、両岸に複数筋の杭列を打ち込んで護岸を行い、その維持管理がなされていたことが既往の調査から解るが、当調査地においても両岸の護岸用杭列は検出されなかったものの、土層断面観察から複数回にわたる肩部の改修や浚渫が行われたと考えられ、西堀川を維持するために苦心した様子を窺うことができる。このような河川管理は、小路の東西両側の宅地を維持することを目的としていたと考えられるが、本来西堀川小路西側道路および側溝であった位置に溝002が掘られていることは、道路を犠牲にしてでも宅地を維持しようとしたことを示唆する。二条二坊十一町跡の調査で検出された西堀川小路西側溝が幅3.3～5.5mを測り、道路幅を縮小して規定の3尺（約0.9m）を大きく超える規模であることも、宅地の維持を最優先にした結果と考えられる。西堀川小路に限らず、右京域では三条二坊十一・十四町の調査で野寺小路の道路が河川化していること、八条二坊二町の調査で西鞠負小路の東側溝が道路幅を縮小して拡幅されていることが確認されており、道路よりも宅地を優先していたことが窺われる。当調査地においても宅地を維持することを目的として、河川両肩の改修や浚渫、西側道路および西側溝の流路化など、西堀川および宅地の維持管理に苦心し、多大な労力を費やしながらも最終的には放棄され、耕作地化されていったと考えられる。また、既往調査の成果から、西堀川は二条から五条の間は両岸の杭列が良好に遺存しており、平安時代中期に埋没したと理解できるが、今回の調査成果はこれを補強するものといえよう。

表 4 遺物観察表

() は残存値

掲載 No	器種	器形	調査区	出土遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	備考
1	須恵器	壺	東区	第 1 層		4.4	(4.4)	N7/0 灰白色	
2	土師器	皿	東区	第 1 層	12.4		2.0	10YR8/3 浅黄橙色	
3	瓦器	椀	東区	第 1 層	11.8		2.9	N3/0 暗灰色	
4	瓦質土器	羽釜	東区	第 1 層			(3.2)	N4/0 灰色	
5	土師器	皿	東区	河 001(上層)	9.4			2.5Y6/1 黄灰色	
6	土師器	高杯	東区	河 001(上層)			(13.6)	7.5YR8/3 浅黄橙色	
7	土師器	甕	東区	河 001(上層)	21.6		(3.9)	7.5YR7/3 にぶい橙色	
8	須恵器	杯	東区	河 001(上層)		10.9	(2.3)	N7/0 灰白色	
9	須恵器	椀	東区	河 001(上層、東肩部)			(3.7)	N7/0 灰白色	
10	須恵器	壺	東区	河 001(上層)		9.4	(3.6)	N6/0 灰色	
11	須恵器	鉢	東区	河 001(上層、東肩部)		7.0	(3.7)	5Y7/1 灰白色	
12	灰釉陶器	椀	東区	河 001(上層、西肩部)		7.4	(1.7)	(釉)10Y6/2 オリーブ灰色 (胎)10YR7/1 灰白色	
13	灰釉陶器	皿	東区	河 001(上層)		6.6	(1.6)	(釉)2.5GY7/1 明オリーブ灰色 (胎)2.5Y8/1 灰白色	
14	緑釉陶器	椀	東区	河 001(上層)		8.0	(1.7)	(釉)10Y7/2 灰白色 (胎)N8/0 灰白色	
15	青磁	椀	東区	河 001(上層、東肩部)		5.4	(2.4)	(釉)5Y6/2 灰オリーブ色 (胎)N7/0 灰白色	
16	白磁	椀	東区	河 001(上層、西肩部)		5.9	(3.0)	(釉)5Y7/2 灰白色 (胎)N8/0 灰白色	
17	瓦	軒平瓦	東区	河 001(上層)	(長) (14.2)	(幅) (19.6)	(瓦当厚) 6.3	N6/0 灰色～ 2.5Y7/3 浅黄色	
18	土師器	皿	東区	河 001(下層)			(1.7)	10YR8/2 灰白色	
19	土師器	皿	東区	河 001(下層、東肩部)			(1.3)	10YR8/4 浅黄橙色	
20	須恵器	鉢	東区	河 001(下層)		15.0	(7.6)	N5/0 灰色	
21	須恵器	鉢	東区	河 001(下層)	19.2		(4.9)	N6/0 灰色	
22	須恵器	壺	東区	河 001(下層)		10.8	(6.7)	5Y6/1 灰色	
23	須恵器	壺	東区	河 001(下層)		3.8	(3.4)	N7/0 灰白色	
24	須恵器	壺	東区	河 001(下層)		12.4	(9.3)	N6/0 灰色	
25	須恵器	平瓶	東区	河 001(下層)	(肩部径) 22.0		(4.9)	N6/0 灰色	
26	灰釉陶器	椀	東区	河 001(下層)		7.6	(2.2)	5Y8/1 灰白色	
27	灰釉陶器	椀	東区	河 001(下層)		7.0	(2.5)	(釉)5Y7/2 灰白色 (胎)N8/0 灰白色	
28	灰釉陶器	皿	東区	河 001(下層)		7.2	(2.1)	N7/0 灰白色	
29	灰釉陶器		東区	河 001(下層)		17.0	(2.8)	(釉)7.5Y6/1 灰色 (胎)5Y8/1 灰白色	
30	緑釉陶器	椀	東区	河 001(下層)		6.1	(2.1)	(釉)10Y7/2 灰白色 (胎)7.5YR8/4 浅黄橙色	
31	緑釉陶器	皿	東区	河 001(下層)		6.5	(1.7)	(釉)5Y6/2 灰オリーブ色 (胎)N7/0 灰白色	
32	緑釉陶器	皿	東区	河 001(下層)		6.4	(1.9)	(釉)7.5Y7/3 浅黄色 (胎)10YR8/2 灰白色	
33	緑釉陶器	皿	東区	河 001(下層、東肩部)		6.5	(1.7)	(釉)5Y6/4 オリーブ黄色 (胎)2.5Y8/2 灰白色	
34	緑釉陶器	皿	東区	河 001(下層)	14.9	6.9	3.2	(釉)黄緑色 (胎)2.5Y8/1 灰白色	
35	緑釉陶器	皿	東区	河 001(下層、東肩部)		7.0	(1.3)	(釉)2.5GY7/1 明オリーブ灰色 (胎)10YR8/3 浅黄橙色	
36	青磁	椀	東区	河 001(下層)		6.0	(2.9)	(釉)5Y6/2 灰オリーブ色 (胎)N7/0 灰白色	
37	青磁	椀	東区	河 001(下層)		6.2	(2.4)	(釉)5Y6/2 灰オリーブ色 (胎)N7/0 灰白色	
38	瓦	軒平瓦	東区	河 001(下層)	(長) (13.5)	(幅) (9.3)	(瓦当厚) 5.3	N3/0 暗灰色	

掲載 No	器種	器形	調査区	出土遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	備考
39	瓦	軒平瓦	東区	河 001(下層)	(長) (18.0)	(幅) (21.5)	(瓦当厚) 6.9	N4/0 灰色	
40	瓦	軒平瓦	東区	河 001(下層)	(長) (18.1)	(幅) (19.7)	(瓦当厚) 6.8	N6/0 灰色	
41	瓦	埴	東区	河 001(下層)	(長) (26.3)	(幅) (14.0)	(厚) 8.6	N3/0 暗灰色	
42	須恵器	杯	東区	溝 002		8.0	(1.8)	N7/0 灰白色	
43	須恵器	壺	東区	溝 002		12.6	(3.2)	N7/0 灰白色	
44	灰釉陶器	段皿	東区	溝 002	18.2	8.1	3.6	(釉) 7.5Y6/2 灰オリーブ色 (胎) N7/0 灰白色	
45	灰釉陶器	椀	西区	井戸 015 掘方最上層		8.5	(3.0)	(釉) 7.5Y7/2 灰白色 (胎) N8/0 灰白色	
46	灰釉陶器	椀	西区	井戸 015 掘方最上層		5.8	(1.9)	N8/0 灰白色	
47	灰釉陶器	壺	西区	井戸 015 掘方最上層		14.1	(3.9)	(釉) 7.5Y6/2 灰オリーブ色 (胎) N8/0 灰白色	
48	緑釉陶器	椀	西区	井戸 015 掘方最上層		8.0	(2.6)	(釉) 7.5Y7/3 浅黄色 (胎) N7/0 灰白色	
49	緑釉陶器	椀	西区	井戸 015 掘方最上層		7.2	(1.9)	(釉) 10Y7/2 灰白色 (胎) N8/0 灰白色	
50	土師器	皿	西区	井戸 015 枠内 (上)	13.4		1.7	7.5YR8/2 灰白色	
51	土師器	皿	西区	井戸 015 枠内 (下)			(1.5)	7.5YR8/4 浅黄橙色	
52	灰釉陶器	椀	西区	井戸 015 枠内 (上)		7.8	(2.7)	N6/0 灰色	
53	緑釉陶器	皿	西区	井戸 015 枠内 (下)		7.6	(1.5)	(釉) 10Y7/2 灰白色 (胎) N7/0 灰白色	
54	緑釉陶器	皿	西区	井戸 015 枠内 (上)		7.7	(1.4)	(釉) 5GY7/1 明オリーブ灰色 (胎) N7/0 灰白色	
55	木製品	曲げ物	西区	井戸 015 枠内 (下)	17.4		13.0		
56	木製品		西区	井戸 015 枠内 (下)	(長) (13.9)	(幅) 1.3	(厚) 0.2		
57	木製品	斎串	西区	井戸 015 枠内 (下)	(長) 14.3	(幅) (1.7)	(厚) 0.2		

附章 自然科学分析

平安京右京六条二坊十二町跡の古環境復元

株式会社 古生態研究所

辻本 裕也

はじめに

今回の分析調査では、調査区で検出された平安時代前葉の西堀川跡の基盤をなす砂礫堆積物中の木材遺体群集の形成年代と植生、および平安時代前葉の西堀川機能期の古植生に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定・樹種同定、花粉分析を実施する。

1 調査地点・試料

1-1 層序

今回の調査地は、石田（1982）による京都盆地の扇状地区分に基づくと、天神川扇状地末端に舌状に延びる新扇状地の扇端付近に位置する（図1）。調査区のうち東区の堆積層の累重状況を図1に示す。調査区の堆積層は、層相および層理面の状況などから、上位より、大きく堆積ユニット1～5に区分される。

（1）基盤堆積物

堆積ユニット5・4が調査区の平安時代の遺構の基盤をなす堆積物（以下、基盤層とする）に相当する。堆積ユニット5は側方および下方の双方への連続性が良い砂礫からなる。堆積上面は、平坦ではなく大きな起伏が認められ凹凸が著しい。北東から南西に向かっての一方向流の掃流によって運搬・堆積した、トラフ型斜交葉理・層理の堆積構造が認められ礫支持をなす砂礫層で、再侵食しながら側方および上方へ積層している状況が観察される。以上の層相から、堆積ユニット5は、東から西に向かう掃流によって運搬堆積した、網状流路の河床を埋積した堆積物と推定される。なお、砂礫層中には木材遺体を取り込まれている。特に東区北西部では木材遺体が集積し、葉理構造をなす泥質砂層で充填されている。これら木材遺体は砂礫層形成期に倒木された流木に由来するとみられる。堆積ユニット5を構成する砂礫層の礫種は、砂岩・頁岩を主とし、チャートに伴い、花崗岩片を希に伴う組成を示しており、天神川扇状地背後の地質と同調的な組成といえる。また、堆積ユニット5の形成年代は後述する木材の14C年代測定値から、縄文時代前期後半と推定される。

堆積ユニット5の上面の凹地部を被覆する堆積ユニット4は、シルト～シルト混じり砂からなる細粒堆積物の積層かならなる。主に東区から西区にかけて確認される。これら細粒堆積物は河川による扇状地面の埋積の進行に伴い、流路が相対的に遠くへ移動した後に、その流路から洪水によって供給されたものと推定される。また、これら細粒堆積物は著しく擾乱されており、層準によっては発達が全体的に不良な古土壌を形成している。これらの特徴から、調査区付近の扇状地上では、

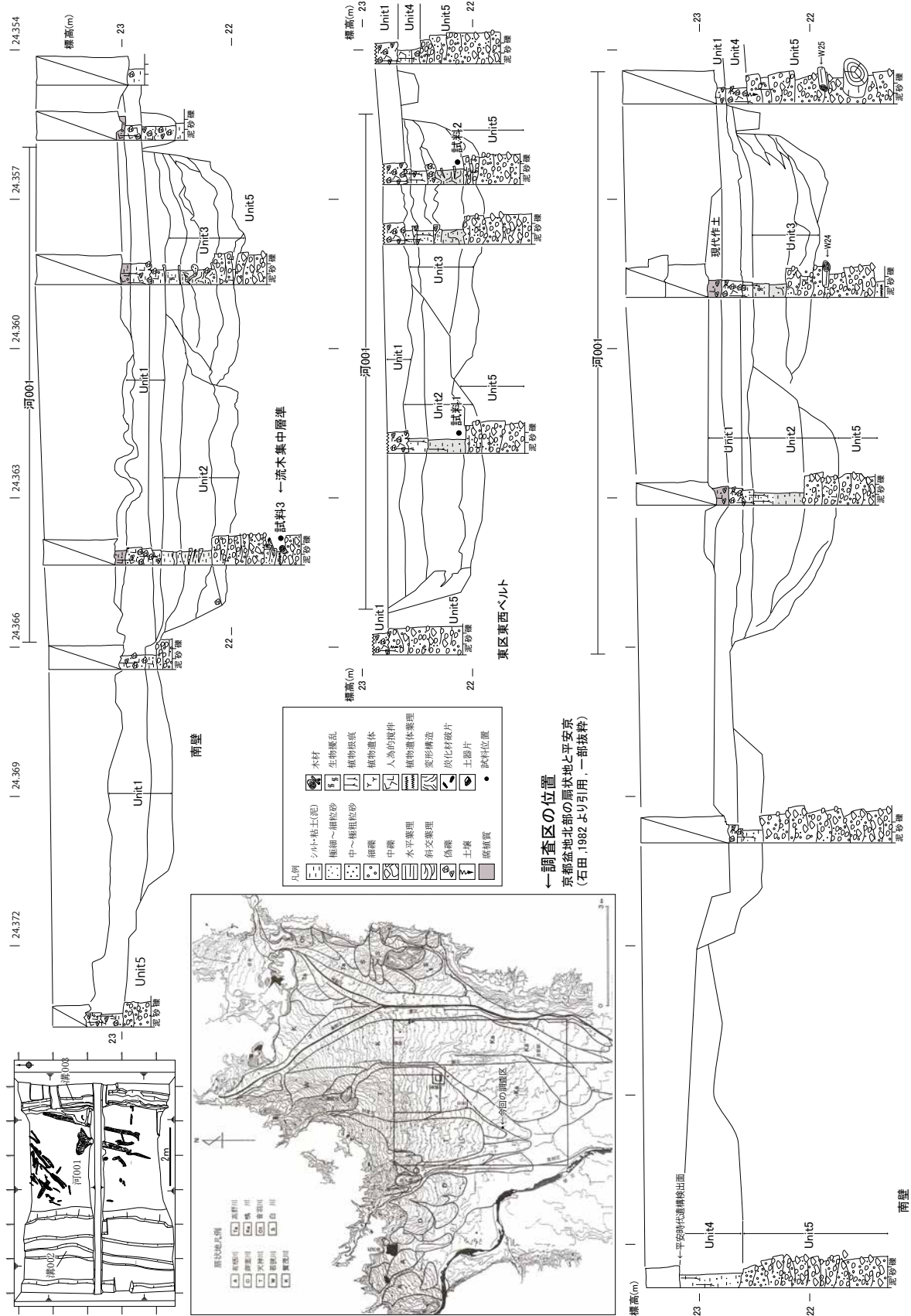


図1 調査地点の層序および試料採取位置

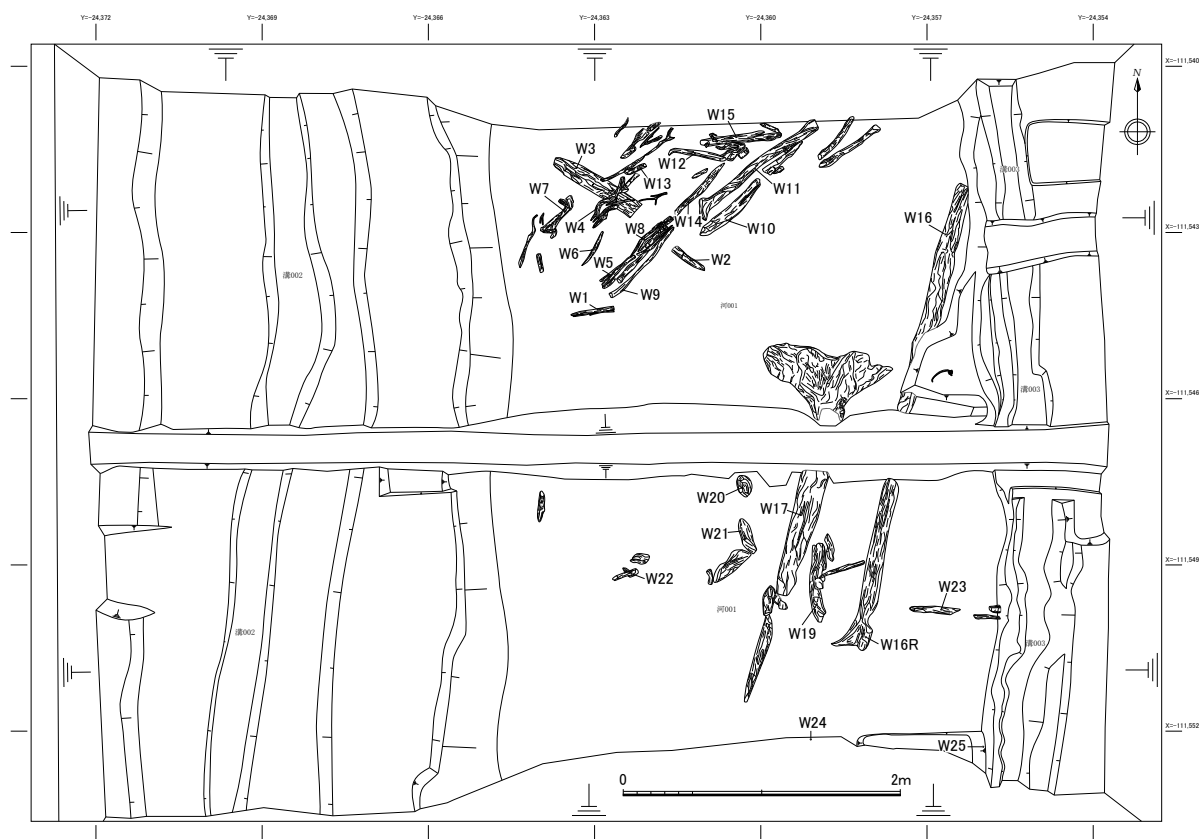


図2 平安時代の基盤層中の木材遺体と試料採取位置

流路移動後の洪水により、地表で土壌発達するような堆積の休止期を挟在して断続的に氾濫原の埋積が進行したことが推定される。

堆積ユニット5の凸部の砂礫層と凹地部の堆積ユニット4上端部は下記する堆積ユニット3・2形成期の人為的攪拌ないし削平により消失している。

(2) 平安時代前半の河川001を充填する堆積物

堆積ユニット3～1は、調査区で検出された平安時代前葉の河川001充填堆積物と、その上位を覆う堆積物が相当する。堆積ユニット3は初期の流路（旧流路と呼ぶ）を充填する堆積物である。最下部に部分的にやや腐植を含む砂質泥層が確認される。直上に累重する掃流下で形成された砂礫層形成時に大部分が侵食されている。砂礫層の上位には有機質ないし腐植質を含む暗灰～暗褐色泥質砂～砂質泥が積層する。この泥質砂～砂質泥層中の上部には人為的に投棄された堆積物、さらに間欠的な土砂流出に伴う砂礫～砂層を挟在する。流路東側の斜面から底部には、基盤堆積物に由来するブロック土が掘削斜面下部に張り付くように分布している。流路底の堆積ユニット5最上部は人為的擾乱の影響が多少及んでいるようにみえる。このような層相から、本流路は基盤堆積物上面より、排水路として掘削された人工流路の可能性がある。本流路は既往の発掘調査成果などから西堀川に相当するとみられている。流路内は当初砂礫を運搬堆積するような水流が存在したが、その後は放棄流路のような堆積場へと変化し、上部ほど乾湿を繰り返す湿地のような堆積場に変化したとみられる。

これらの旧流路を充填する堆積物は、いずれも堆積後の擾乱作用により乱れているが、下半部は著しく流動変形している。この変形構造は水底下の堆積物で確認される、地震動に起因する含水塑性変形ユニット構造（Matsuda,2000）に対比される。下記する西側に掘削される新流路を充填する堆積物では変形構造が確認されないこと、河川001の充填年代が出土遺物から9世紀後半～10世紀初頭と推定されることから、平安時代前葉に発生した地震動に起因する変形構造とみられる。同時期とみられる地震動に起因する変形構造は、平安京右京三条一坊六・七町跡（百花亭）の園池堆積物でも確認されている（京都市埋蔵文化財研究所,2013）。また、長岡京跡左京域の条坊側溝で普遍的に確認される変形構造も同時期の可能性がある。

旧流路の充填が進行した段階で、西側に流路が拡幅されている。この段階で流路幅は初期の2倍となり、滞筋も西側に移動している。この新段階の流路充填堆積物が堆積ユニット2に相当する。堆積ユニット2の堆積層の累重状況は堆積ユニット3と類似する。最下部に腐植を含む暗灰色砂質泥～灰色砂質泥が部分的に確認されるが、直上に累重する砂礫層形成時に侵食されている。その上位には間欠的な土砂流出時の砂層を挟在する、腐植を含む砂質泥～泥質砂が累重する。上部層準ほど腐植含量が減り、かつ粗粒化しており、周囲からの土砂流入が増大していることが窺える。流路斜面部には人為的営力で形成された堆積物が西側および旧流路側の斜面に貼り付けられている状況も確認される。

河川001を充填する堆積ユニット3・2は、出土遺物の年代観から、9世紀後半～10世紀初頭の短期間に充填されていることになる。当該期の調査区周辺が開けており、地表物質などが流入しやすい

い状況にあった、あるいは降水量が多く土砂の流入量が増加したなどの可能性が考えられる。短期間に河川001の埋積が進行したことにより、調査地一帯の基準面が上昇し、河岸の水文の条件が変化し、湿潤化したとみられる。河川001が短期間に西側に拡幅された背景には、このような水文の状況変化が関係している可能性がある。

堆積ユニット1は、河川001の埋没が高水敷の可能性のある河岸のテラス付近まで進行した段階で堆積する灰色砂質泥～泥質砂と、その上位に類移住する人為的営力で形成された堆積物が相当する。

(3) 分析試料

花粉分析試料は、平安時代前半の河川001充填堆積物の新・旧流路充填堆積物下部から採取した2点(2地点試料1・1地点試料2)と、基盤堆積物中の木材遺体集積部の泥質砂(3地点試料3)の3点である(図1)。樹種同定および年代測定試料は、基盤堆積物から出土した木材遺体群集から採取した25点(W1～25)である(図1・2)。年代測定に用いられるように最外部を含む木片を採取した。

基盤堆積物中の木材遺体試料のうち、W21は根張りの状態である。また、W16とW17には根株部分が残る。一方、W1は板状の加工材(板状木製品)であり、W2も先端が円錐状になる状況から杭状の木製品の可能性がある。このうちW1出土層準は上位の河川001下部の砂礫層に対比される可能性もある。

2 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

試料の付着物を取り除いた後、酸－アルカリ－酸(AAA:Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。

化学処理後の試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させ、真空ラインで二酸化炭素を精製する。精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

測定方法は、加速器をベースとした14C-AMS専用装置を使用し、14Cの計数、13C濃度(13C/12C)、14C濃度(14C/12C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。δ13Cは、試料炭素の13C濃度(13C/12C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である。

14C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中14C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach,1977)。14C年代はδ13Cによって同位体効果を補正する必要がある。

ある。補正した値を結果表に示す。14C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、14C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

14C年代の暦年較正にはOxCal4.4(較正曲線データ: IntCal20)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

(2) 花粉分析

試料(湿重量約3–4g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。プレパラート作成は、残渣を適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入する。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に産出する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表と花粉化石群集の層位分布図として示す。なお、複数の種類(分類群)をハイフンで結んだものは種類間の区別が困難なものである。

(3) 樹種同定

剃刀を用いて、木片から木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製する。切片をガム・クロラル(抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

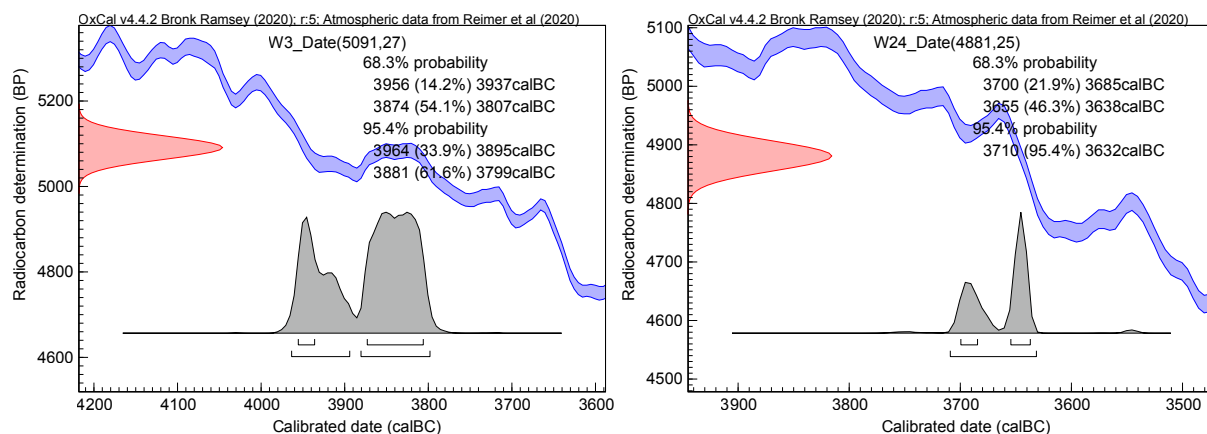
3 結果

(1) 放射性炭素年代測定

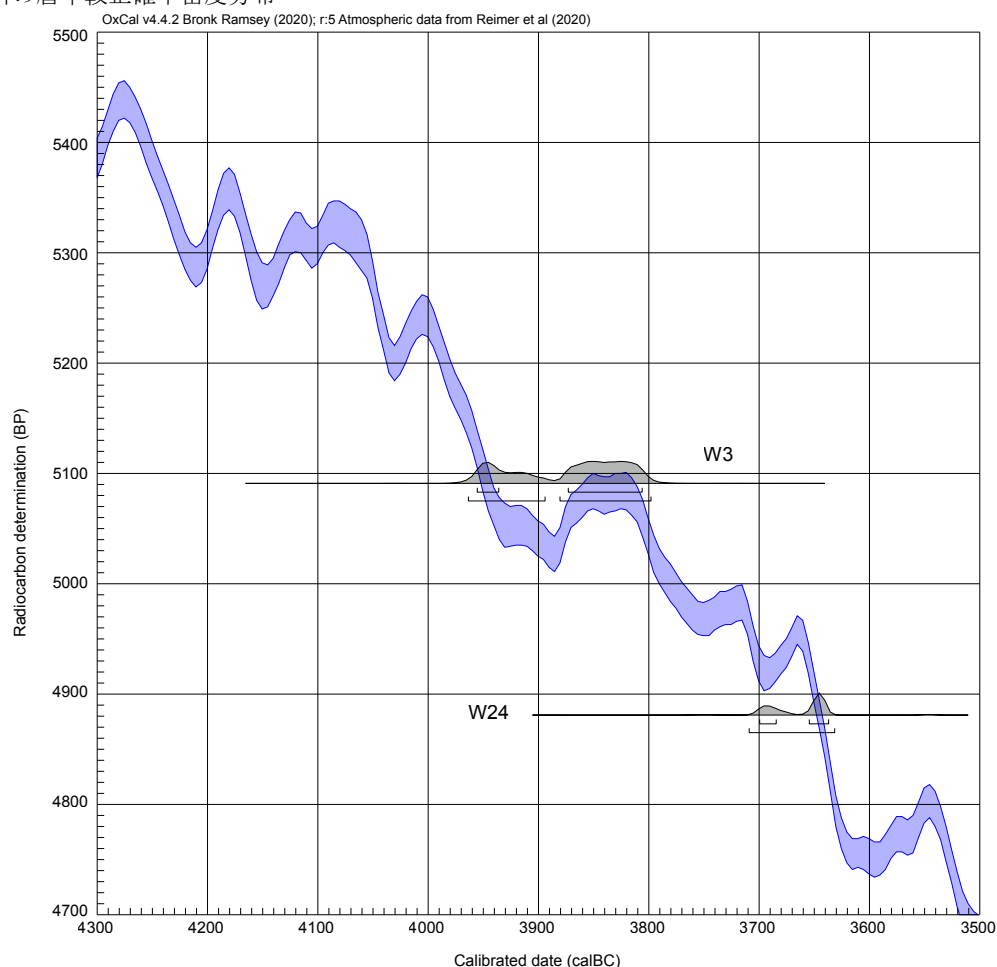
結果を表1、図3に示す。平安時代の基盤をなす堆積物中の木材遺体のうち、下位層準に位置する木材は、14C年代値で $5090 \pm 30\text{yBP}$ 、 2σ の暦年較正年代で3964–3799cal BCを示す。上位層準の木材は $4880 \pm 30\text{yBP}$ 、 2σ の暦年較正年代で3710–3632cal BCを示す。この14C年代値は、工藤(2012)による縄文時代の実年代の集成に基づくと、おおよそ縄文時代前期後半に比定される。ただし、木材遺体の層位分布状況をみると、下位の砂礫層と上位の砂礫層で約200年の年代差が生じ

表 1 基盤堆積物中の流木の炭素 14 年代測定および暦年較正結果

試料名	状態	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	年代値 yrBP	暦年較正用 yrBP	暦年較正結果		測定 番号
					1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲	
W4	流木 (エノキ属)	-26.70 $\pm$ 0.23	5090 $\pm$ 30	5091 $\pm$ 27	3956calBC - 3937calBC (14.2%) 3874calBC - 3807calBC (54.1%)	3964calBC - 3895calBC (33.9%) 3881calBC - 3799calBC (61.6%)	IAAA- 201220
W24	流木 (カエデ属)	-24.63 $\pm$ 0.26	4880 $\pm$ 30	4881 $\pm$ 25	3700calBC - 3685calBC (21.9%) 3655calBC - 3638calBC (46.3%)	3710calBC - 3632calBC (95.4%)	IAAA- 201305



a) 各試料の暦年較正確率密度分布



b) Intcal120較正曲線に配した各試料の暦年較正確率密度分布

図 3 暦年較正結果

ており、間欠的な土砂流出に伴うものであったことが推定される。

(2) 花粉分析

花粉分析結果を表2、図4に示す。調査区北西部の基盤堆積物中の木材遺体集積部を充填していた泥質砂層中の花粉化石群集は、木本花粉が卓越する。木本花粉の各種類では、特定の種類が多産することはなく、コナラ亜属・アカガシ亜属・エノキ属・ムクノキ属・トチノキ属・キハダ属などが特徴的に産出する。

平安時代の河川001を充填する堆積物の花粉化石群集は、新旧流路の双方で類似する組成を示

表2 花粉分析結果

分類群	Taxa	上段:地点 下段:試料名		
		2地点	1地点	3地点
		1	2	3
木本花粉	Arboreal pollen			
モミ属	<i>Abies</i>	6	7	8
ツガ属	<i>Tsuga</i>	18	1	0
マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	50	0	0
マツ属	<i>Pinus</i>	2	16	1
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	7	3	1
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	86	41	8
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	Taxaceae-Cepalotaxaceae-	26	12	10
サワグルミ属	Cupressaceae	3	1	0
オニグルミ属	<i>Pterocarya</i>	0	0	1
クマシデ属-アサダ属	<i>Juglans</i>	8	3	4
ハシバミ属	<i>Carpinus-Ostrya</i>	3	1	1
カバノキ属	<i>Corylus</i>	2	0	0
ハンノキ属	<i>Betula</i>	0	0	1
ブナ属	<i>Alnus</i>	1	0	4
コナラ亜属	<i>Fagus</i>	31	12	18
アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	20	6	22
クリ属-シイノキ属-マテバシイ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	4	5	8
ニレ属-ケヤキ属	<i>Castanea-Castanopsis-Pasania</i>	1	2	6
エノキ属-ムクノキ属	<i>Ulmus-Zelkova</i>	4	1	23
イヌザンショウ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	0	1	5
キハダ属	<i>Fagara</i>	0	0	7
アカガシワ属	<i>Phellodendron</i>	0	0	2
ウルシ属	<i>Mallotus</i>	1	0	2
モチノキ属	<i>Rhus</i>	1	1	0
カエデ属	<i>Ilex</i>	1	0	2
トチノキ属	<i>Acer</i>	0	1	11
ブドウ属	<i>Aesculus</i>	0	0	4
ツツジ科	<i>Vitis</i>	0	1	0
エゴノキ属	Ericaceae	0	0	1
イボタノキ属	<i>Styrax</i>	1	0	1
トネリコ属	<i>Ligustrum</i>	0	0	1
テイカカズラ属	<i>Fraxinus</i>	0	0	1
ガマズミ属	<i>Trachelospermum</i>	0	0	1
草本花粉	Nonarboreal pollen			
ガマ属-ミクリ属	<i>Viburnum</i>	13	1	1
オモダカ属	<i>Typha-Sparganium</i>	1	1	0
イネ科	<i>Sagittaria</i>	192	123	4
カヤツリグサ科	Gramineae	58	30	5
ミスオイ属	Cyperaceae	1	0	0
ユリ科	<i>Monochoria</i>	1	0	0
カラハナソウ属	Liliaceae	0	0	1
クワ科	<i>Humulus</i>	5	1	7
サナエタデ節-ウナギツカミ節	Moraceae	3	3	0
ソバ属	<i>Persicaria-Echinocaulon</i>	0	2	0
アカザ科-ヒユ科	<i>Fagopyrum</i>	20	24	1
ナデシコ科	Chenopodiaceae-Amaranthaceae	3	6	0
キンボウゲ科	Caryophyllaceae	2	0	0
アブラナ科	Ranunculaceae	4	11	0
バラ科	Cruciferae	2	0	0
マメ科	Rosaceae	2	0	0
チョウジタデ属	Leguminosae	0	1	0
アリノトウグサ属	<i>Ludwigia</i>	0	1	0
セリ科	<i>Haloragis</i>	4	3	2
シソ科	Umbelliferae	1	0	0
ヨモギ属	Labiatae	39	21	2
ベニバナ属	<i>Artemisia</i>	1	1	0
キク亜科	<i>Carthamus</i>	2	2	0
タンポポ亜科	Carduoideae	4	0	0
シダ類孢子	Cichorioideae			
サンショウモ	Fern Spores	4	2	0
単条溝型孢子	<i>Salvinia natans</i>	12	6	0
三条溝型孢子	Monolet spore	10	2	1
合計	Trilete spore			
木本花粉	Total	276	115	154
草本花粉	Arboreal pollen	358	231	23
シダ類孢子	Nonarboreal pollen	26	10	1
不明花粉	Fern spores	6	2	4
不能花粉	unknown	20	12	12
その他	Broken pollen			
寄生虫卵(蠶虫卵)	Other	6	8	0
	egg of <i>Trichuris</i>			

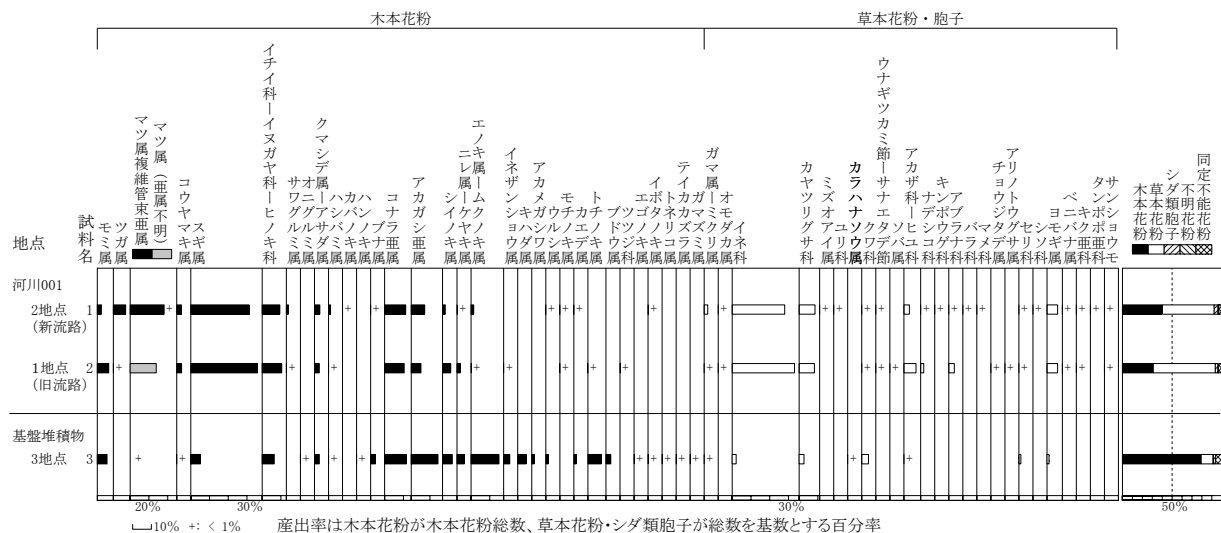


図4 花粉化石群集の層位分布

表3 樹種同定結果

番号	層位	性格	形状	直径	樹種	備考
W1	下位砂礫層上部の砂質泥層上面	板状木製品	板目	—	スギ	
W2	下位砂礫層	杭?	芯持丸木	11cm	ムクノキ	
W3	下位砂礫層上部の砂質泥層下面	自然木	芯持丸木	30cm	ムクノキ	
W4	下位砂礫層上部の砂質泥層	自然木	芯持丸木	7cm	エノキ属	14c実施
W5	下位砂礫層上部の砂質泥層	自然木	芯持丸木	6cm	ムクノキ	
W6	下位砂礫層上部の砂質泥層	自然木	ミカン割状	—	カエデ属	
W7	下位砂礫層上部の砂質泥層	自然木	芯持丸木	7cm	ネムノキ	
W8	下位砂礫層上部の砂質泥層	自然木	芯持丸木	6cm	ムクノキ	
W9	下位砂礫層上部の砂質泥層	自然木	形状不明	—	ヤマグワ	
W10	下位砂礫層上部の砂質泥層	自然木	芯持丸木	20cm	ムクノキ	
W11	下位砂礫層上部の砂質泥層	自然木	芯持丸木	14cm	ムクノキ	
W12	下位砂礫層上部の砂質泥層	自然木	芯持丸木	9.5cm	キハダ	
W13	下位砂礫層上部の砂質泥層	自然木	芯持丸木	19cm	ヤマグワ近似種	乾燥による収縮
W14	下位砂礫層上部の砂質泥層最下面	自然木	芯持丸木	11cm	ムクノキ	
W15	下位砂礫層上部の砂質泥層	自然木	芯持丸木	14cm	エノキ属	
W16	下位砂礫層	自然木	芯持丸木	34cm	ケンボナシ属	根株あり
W17	下位砂礫層	自然木	芯持丸木	34cm	エノキ属	根株あり
W18	下位砂礫層	自然木	芯持丸木	14cm	ヤマグワ	
W19	下位砂礫層	自然木	芯持丸木	24cm	エノキ属	
W20	下位砂礫層	自然木	芯持丸木	21cm	ヤナギ属	立木?
W21	下位砂礫層	自然木	—	30cm前後	キハダ	根張り部分
W22	下位砂礫層	自然木	芯持丸木	12cm	ムクノキ	
W23	上位砂礫層	自然木	芯持丸木	22cm	コナラ属コナラ節	
W24	上位砂礫層	自然木	芯持丸木	15cm	カエデ属	14c実施
W25	上位砂礫層	自然木	芯持丸木	23cm	ムクノキ	

す。草本花粉の占める割合が50～60%と高い。木本花粉では、針葉樹のスギ属が30%以上と多産し、次いでマツ属20%弱の産出頻度を示す。このほかコナラ亜属・アカガシ亜属などを伴う。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科や荒地に普通なヨモギ属、水生植物のガンマ属・ミクリ属、オモダカ属、ミズアオイ属、栽培種のソバ属・ベニバナ属などを伴う。

(3) 樹種同定

樹種同定結果を表4に示す。自然木を中心とした木材は、針葉樹1分類群(スギ)と広葉樹9分類群(ネムノキ、ケンボナシ属、ムクノキ、エノキ属、ヤマグワ、コナラ属コナラ節、ヤナギ属、カエデ属、キハダ)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・スギ *Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don ヒノキ科スギ属

資料は乾燥しており、分析試料を採取した端部は全て年輪界で割れている。軸方向組織は仮道管

と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・ネムノキ *Albizia julibrissin* Durazz. マメ科ネムノキ属

環孔材。孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に径を減じ、晩材部では小径の道管が単独または2～4個が複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、1～2細胞幅、1～30細胞高。軸方向の柔組織は周囲状で晩材部ではやや翼状となる。

・ケンボナシ属 *Hovenia* クロウメモドキ科

環孔材。孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に径を減じ、晩材部では小径で厚壁の道管が単独または2個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は異性、1～5細胞幅、1～40細胞高。

・ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planchon アサ科ムクノキ属

散孔材。道管は単独または2～3個が放射方向に複合して散在する。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～30細胞高。軸方向の柔組織は周囲状およびターミナル状。

・エノキ属 *Celtis* アサ科

環孔材で、孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合し接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～6細胞幅、1～50細胞高で鞘細胞が認められる。

・ヤマグワ *Morus australis* Poiret クワ科クワ属

環孔材。孔圏部は3～5列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では単独または2～4個が複合して斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔、壁孔は交互状となる。小径の道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～6細胞幅、1～50細胞高。

W13は乾燥による組織の収縮が激しい。道管配列からヤマグワと考えられるが、放射組織が潰れて幅や高さが観察できないことから近似種とした。

・コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

環孔材。孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に径を減じたのち、多数が集まって火炎状に配列し、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科

散孔材。道管は単独または2～3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は異性、単列、1～15細胞高。

・カエデ属 *Acer* ムクロジ科

散孔材。道管は単独または2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は対列～交互状となる。道管の内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～30細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・キハダ *Phellodendron amurense* Ruprecht ミカン科キハダ属

環孔材。孔圏部は3～5列、孔圏外でやや急激に径を減じたのち、小径の道管が塊状に複合して接線・斜方向に紋様状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。小径の道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～40細胞高。

4 考察

(1) 基盤堆積物の形成年代と植生

平安時代前半の遺構の基盤をなす堆積物は砂礫からなり、その形成年代は年代測定の結果、縄文時代前期後半と推定された。堆積ユニット5の砂礫層上部と下部では木材遺体の年代値において約200年の年代差が生じていることからみて、土砂流出は間欠的に発生していたことになる。京都盆地北部の扇状地の発達史を考える上で貴重な成果である。また、縄文時代前期の土砂流出の増大は、桂川水系の寺戸川流域でも確認されている(矢野他,2014)。また、地域は異なるが大阪平野東部の生駒山山麓の扇状地においても同時期の土砂流出の増大傾向が確認されている。このように縄文時代前期後半頃の土砂流出の増大傾向は、降水量増加などの広域的な環境変化に起因するとみられる。土砂流出後、地形条件は大きく変化し、新たな植生の成立領域などになっていたとみられる。

基盤堆積物に挟在する木材遺体群集は、その成因から扇状地の植生を構成していた要素とみられる。同定された樹種は、ネムノキ、ケンボナシ属、ムクノキ、エノキ属、ヤマグワ、コナラ属コナラ節、ヤナギ属、カエデ属、キハダであり、いずれも河畔林要素からなる。一方、木材集積部の泥質砂の花粉化石群集でも、エノキ属－ムクノキ属、キハダ属、トチノキ属などの河畔林要素が比較的多く産出している。

これらの要素が、当時の扇状地の氾濫原などに生育していたとみられる。年輪数は計測していないため、樹齢は不明であるが、大木は少ない。また、堆積層の累重状況と年代測定結果を踏まえると、土砂流出期の堆積休止期に後背氾濫原に再生した林分を構成していた要素であったとみられ、遷移の途中相であったことが示唆される。なお、木材集積部直上の砂礫層から出土したW1の板状木製品は割裂性の高い材質を有するスギに同定された。上記木材遺体とは形状、生態性を含め異質である。先述したように河川001の新流路下部の砂礫層準に帰属する遺物の可能性が高い。

(2) 平安時代初頭の植生

西堀川に相当する河川001埋土の花粉化石群集は、旧流路・新流路を通じて変化がなく、草本花粉が卓越した。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が多産し、荒れ地に多いヨモギ属のほか、オモダカ

属などの水生植物が産出した。このような産状から、当該期の河川周辺は基本的に開けた場所であった可能性が高く、河川内にはイネ科・カヤツリグサ科や水生植物のミクリ属・オモダカ属・ミズオアイ属などが生育していたとみられる。また、栽培種のソバ属やベニバナ属も産出しており、当該期に流路沿いにこれらの植物が生育ないし栽培されていたことが推定される。これら栽培種は平安京域の多くの地点で確認されており、ベニバナ属などは前栽として植栽されていた可能性がある。

木本花粉は、周辺森林植生を反映しているとみられるが、多産種の多くが風媒性であるため、遠距離飛来したものに由来する場合、遠方の植生を反映していることになる。局地性・地域性の判断については、今後同一水系における調査事例の蓄積を待って再評価したい。

スギ属に次いで多産するマツ属は二次林の代表的な樹種である。マツ属花粉もまた風媒性で生産量の多い種類であり、広域よりもたらされた可能性もあるため、調査地近辺に生育していたかは言及できない。平安京域では、平安時代以降、マツ属花粉が増加する地点が多く確認されており、地域的な傾向として認識できる。当該期の山地や扇状地などの植生を反映しているとすれば、人為的攪乱が及んだ、二次林のような林分の存在が示唆される。ただし、先述の百花亭では、池周囲に植栽樹として植えられていたことが確認されており、植栽樹として京域に分布していた可能性も充分考えられる。

河川001の埋没時期は、出土遺物から9世紀後半から10世紀初頭とされる。先述したように調査地点の基準面は上昇傾向にあり、河岸の湿潤化が進行したとみられる。このような変化は平安京域南部の複数地点で確認されている。このような地表環境の変化は、人間活動に多大な影響を与えたとみられ、それに伴う土地利用も変化したとみられる。植生も変化したと想像されるが、今回の調査では分析層準が少なく、そのような評価が難しい。今後、既往の調整成果を含め、このような平安時代前葉の環境変化について検討していくことが必要と考える。

引用文献

- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 石田志朗,1982,京都盆地北部の扇状地-平安京遷都時の京都の地勢-古代文化,34, 1-14
- 工藤雄一郎,2012,旧石器・縄文時代の環境文化史:高精度放射性炭素年代測定と考古学,新泉社,373p.
- Matsuda,J.-I.,2000,Seismic deformation structures of the post-2300 a BP muddy sediments in Kawachi lowland plain,Osaka,japan,Sedimentary Geology,135,99-116.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter

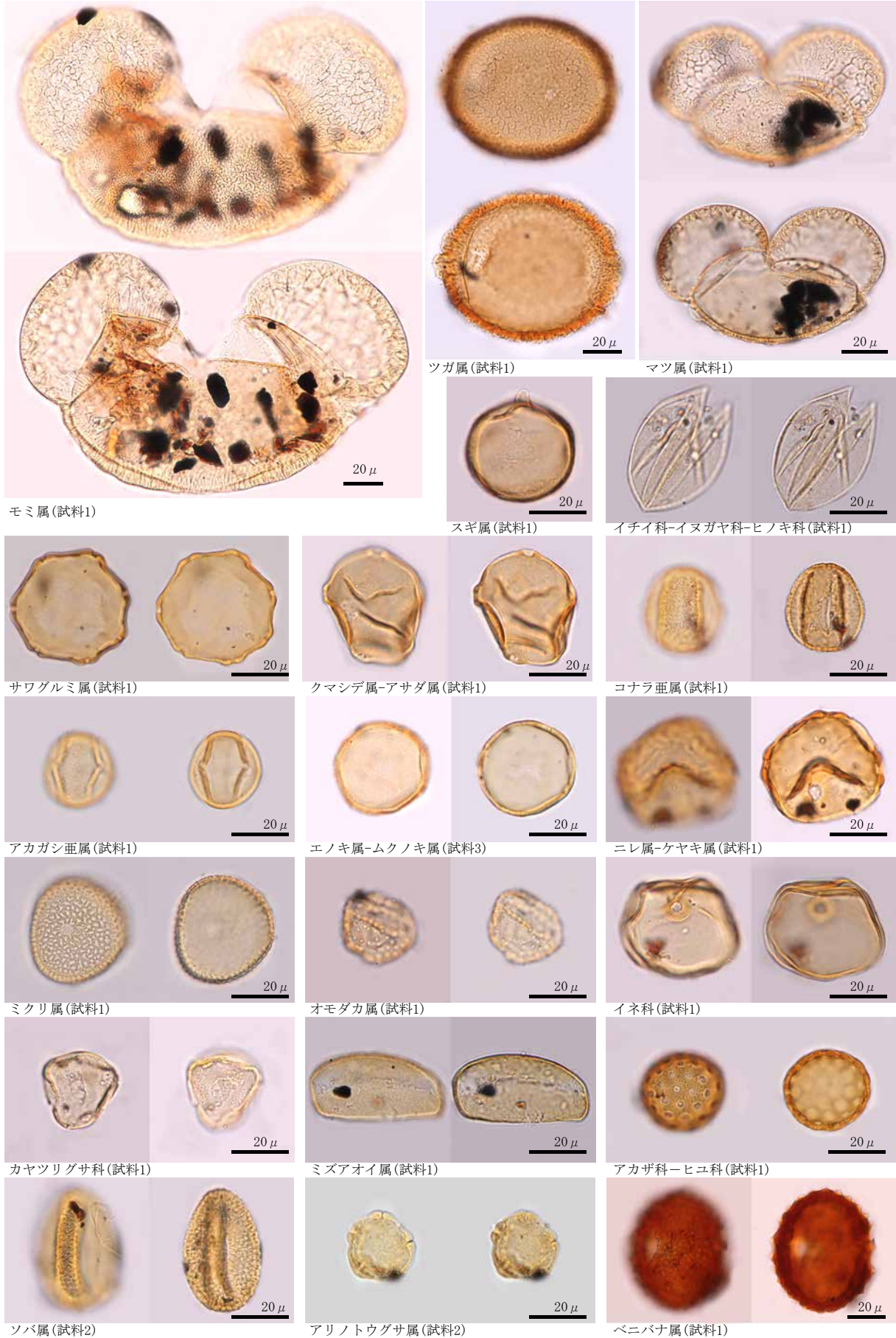
H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .

島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.

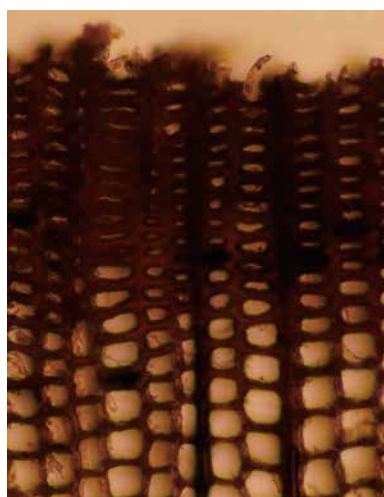
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編) ,1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .

矢野健一・中塚良・佐々木尚子・浦蓉子・杉山淳司・木村啓章・辻本裕也,2014,京都盆地中西部低地、向日市寺戸川縦坑・河床堆積層の文化財科学的研究,日本文化財科学会第31回大会要旨集
財団法人京都市埋蔵文化財研究所,2013,平安京右京三条一坊六・七町跡-西三条第(百花亭)跡-.京都

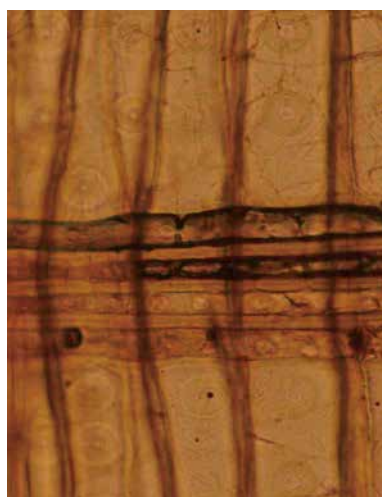
図版 1 花粉化石



図版2 木材（1）



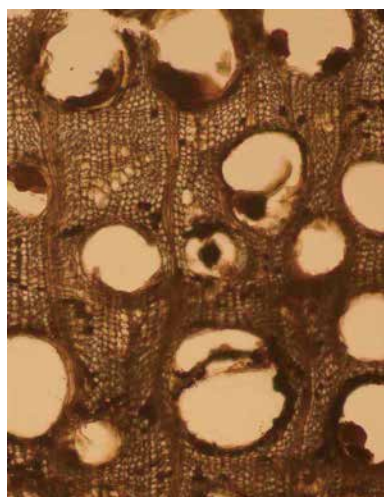
1a



1b



1c



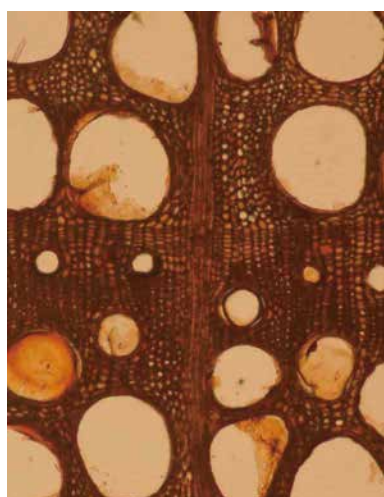
2a



2b



2c



3a



3b

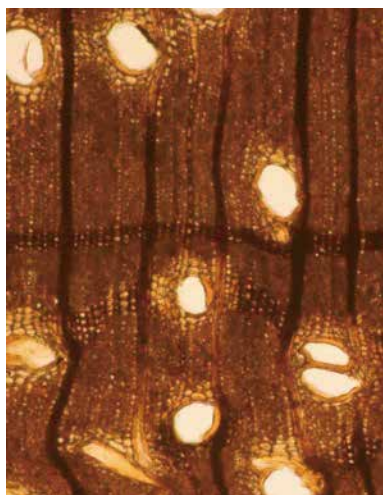


3c

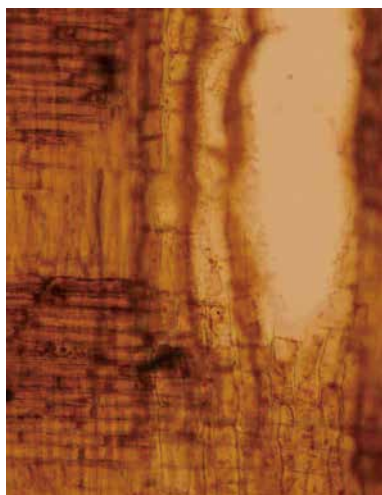
1. スギ(W1)
 2. ネムノキ(W7)
 3. ケンボナシ属(W16)
- a: 木口, b: 柾目, c: 板目

各写真のスケールは0.1mm

図版3 木材(2)



4a



4b



4c



5a



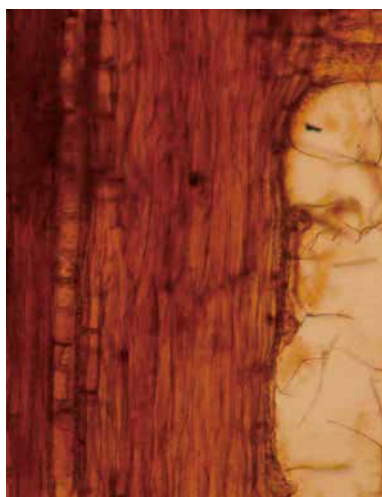
5b



5c



6a



6b



6c

4. ムクノキ(W3)

5. エノキ属(W4)

6. ヤマグチ(W9)

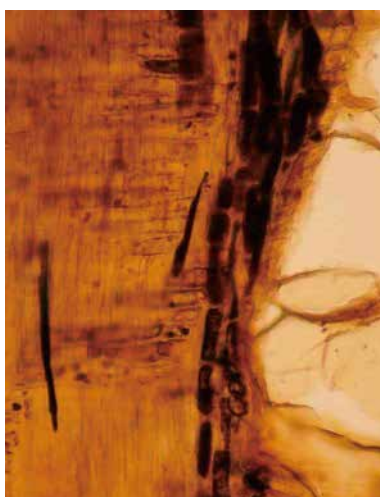
a: 木口, b: 柁目, c: 板目

各写真のスケールは0.1mm

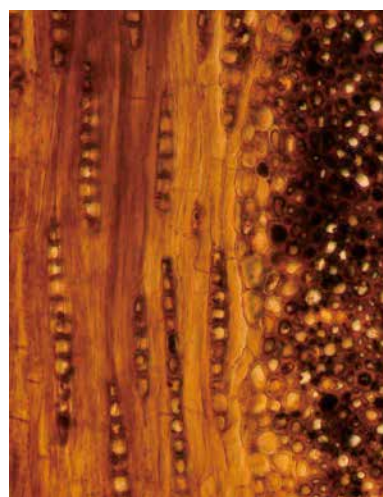
図版4 木材(3)



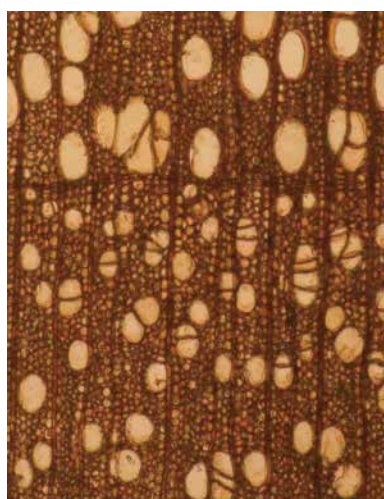
7a



7b



7c



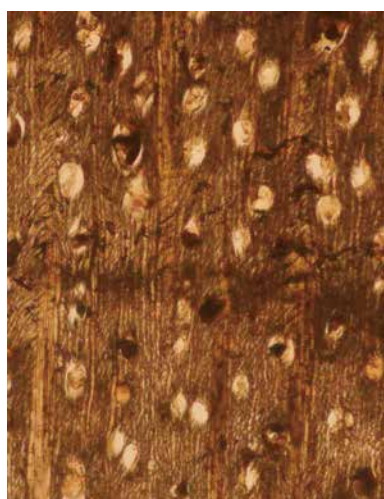
8a



8b



8c



9a



9b



9c

7. コナラ属コナラ節(W23)

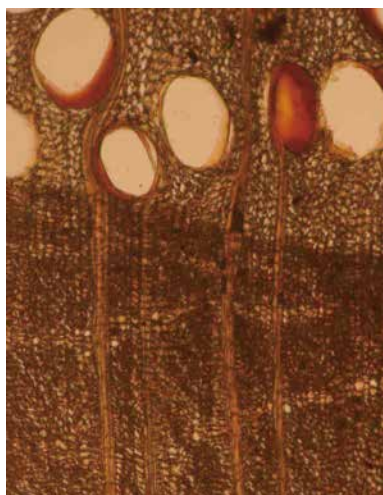
8. ヤナギ属(W20)

9. カエデ属(W6)

a: 木口, b: 柾目, c: 板目

各写真のスケールは0.1mm

図版5 木材(4)



10a



10b



10c

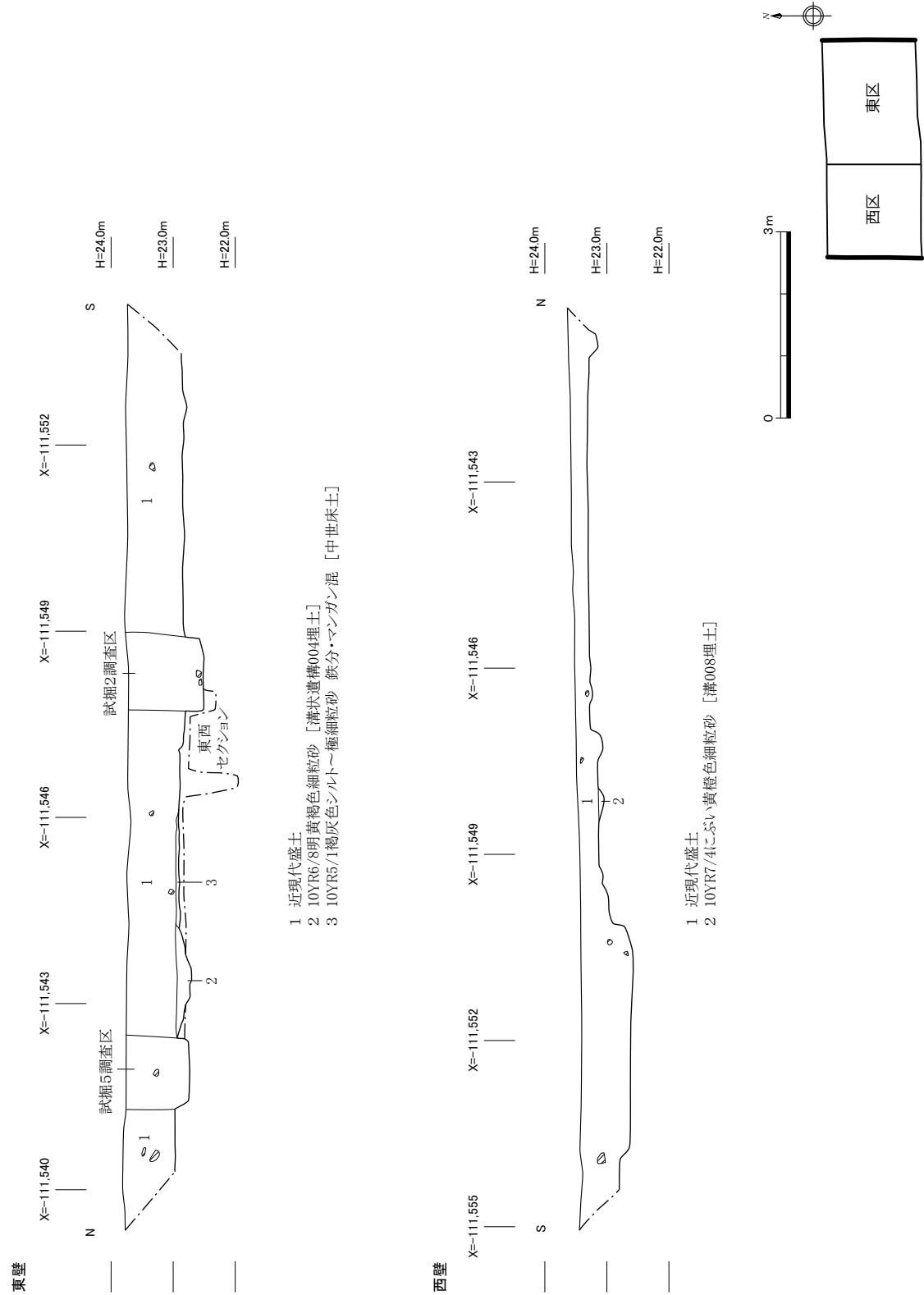
10. キハダ(W12)

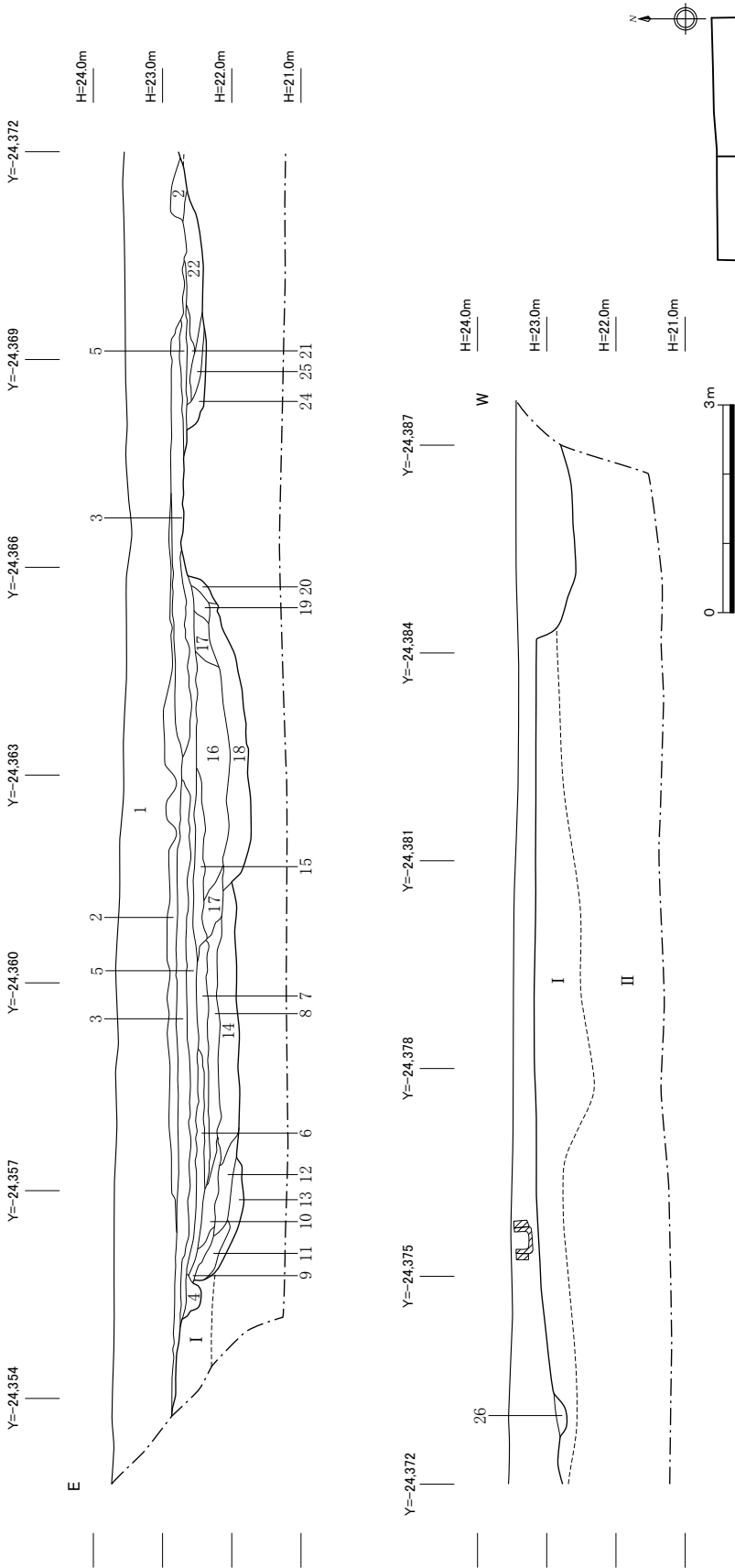
a: 木口, b: 柁目, c: 板目

各写真のスケールは0.1mm

図 版

調査区東壁・西壁土層断面図（1：100）

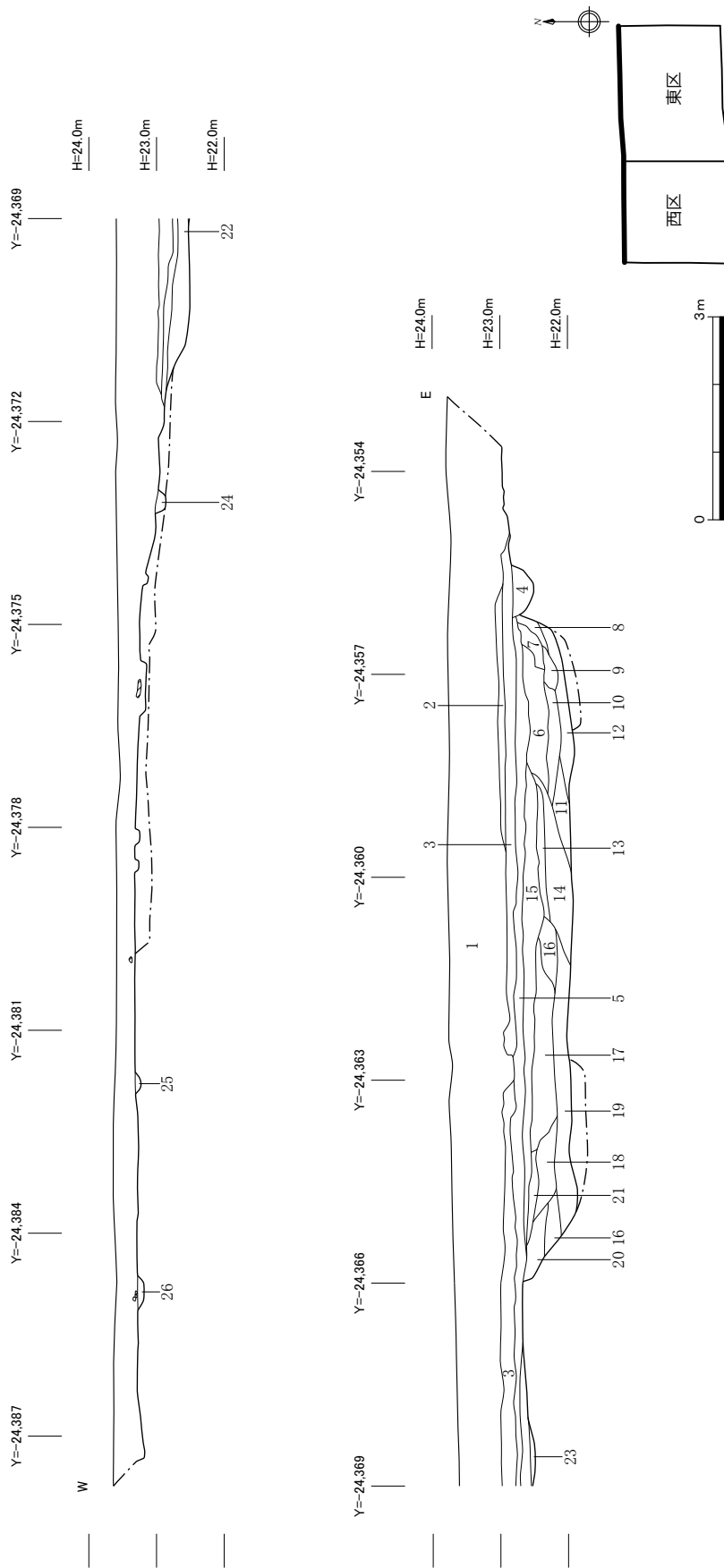


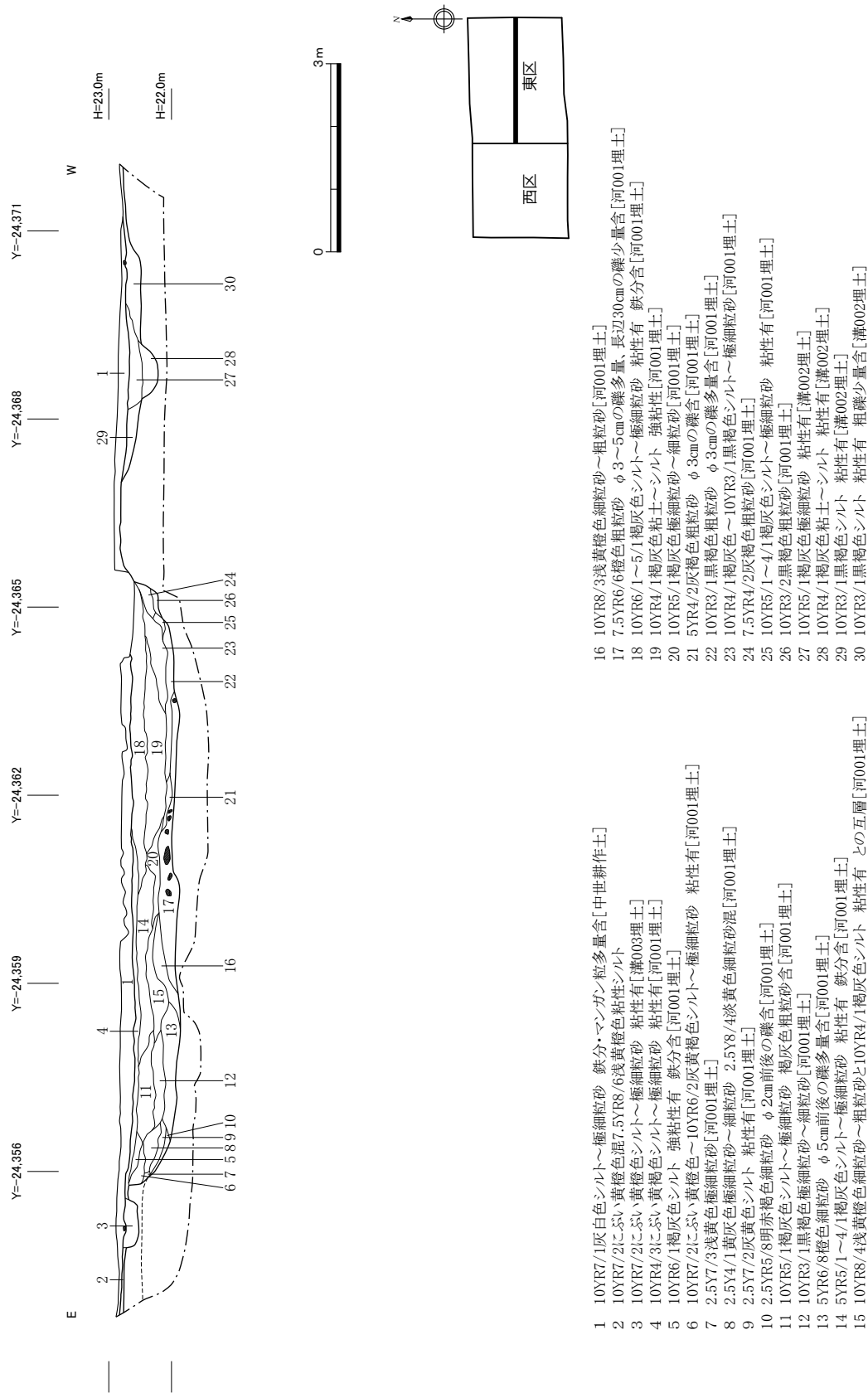


- 1 近現代盛土
2 10YR4/1褐灰色極細粒砂 粘性有 [近世以降盛土]
3 10YR5/1褐灰色シルト～極細粒砂 鉄分・マンガノ混 [中世床土]
4 10YR7/1灰白色シルト～極細粒砂と10YR5/1褐灰色シルト～極細粒砂が混じり合う
粘性有 粗粒砂混 [溝003埋土]
5 10YR6/1褐灰色シルト 粘性有 鉄分混 [中世床土]
6 7.5YR5/1褐灰色シルト～極細粒砂 粘性有 鉄分混 [河001埋土]
7 10YR6/1褐灰色細粒砂 鉄分混 [河001埋土]
8 10YR5/1褐灰色シルト～極細粒砂 粘性有 [河001埋土]
9 10YR7/2にぶい黄褐色シルト～極細粒砂と10YR6/1褐灰色シルト～極細粒砂が混じり合う
[河001埋土、東肩部盛土?]
10 10YR5/1褐灰色極細粒砂～細粒砂 粘性有 鉄分混 [河001埋土]
11 10YR7/2にぶい黄褐色シルト～極細粒砂と10YR6/1褐灰色シルト～極細粒砂が混じり合う
10YR6/1褐灰色極細粒砂混 [河001埋土、東肩部盛土?]
12 10YR3/1黒褐色シルト～極細粒砂 粘性有 [河001埋土]
13 7.5YR5/6明褐色粗粒砂 φ3cmの礫混 [河001埋土]
14 2.5Y7/4浅黄色粗粒砂 φ5～10cmの礫混 [河001埋土]
15 10YR4/1褐灰色シルト～極細粒砂 粘性有 鉄分混 [河001埋土]
16 10YR2/1黒色シルト～極細粒砂 粘性有 鉄分混 [河001埋土]
17 10YR3/2黒褐色細粒砂 [河001埋土、土壌化、肩部盛土?]
18 5YR5/6明赤褐色粗粒砂 φ3～5cmの礫混 10YR3/1黒褐色細粒砂ブロック混 [河001埋土]
19 10YR6/1褐灰色細粒砂 10YR8/1灰白色細粒砂ブロック混 [河001埋土、西肩部盛土?]
20 10YR7/2にぶい黄褐色シルト～極細粒砂 粘性有 [河001埋土、西肩部盛土?]
21 10YR4/1褐灰色シルト～極細粒砂 粘性強 [溝002埋土]
22 7.5YR4/1褐灰色シルト～極細粒砂 粘性強 [溝002埋土]
23 7.5YR5/6明褐色粗粒砂 10YR5/1褐灰色シルト～極細粒砂ブロック混 [溝002埋土]
24 10YR4/1褐灰色シルト～極細粒砂 粘性強 [溝002埋土]
25 7.5YR5/1褐灰色シルト～極細粒砂 粘性強 [溝002埋土]
26 10YR4/2灰黄褐色細粒砂～粗粒砂 [溝006埋土]
I 10YR6/8明黄褐色シルト～極細粒砂
II 7.5YR5/8明褐色粗粒砂～礫

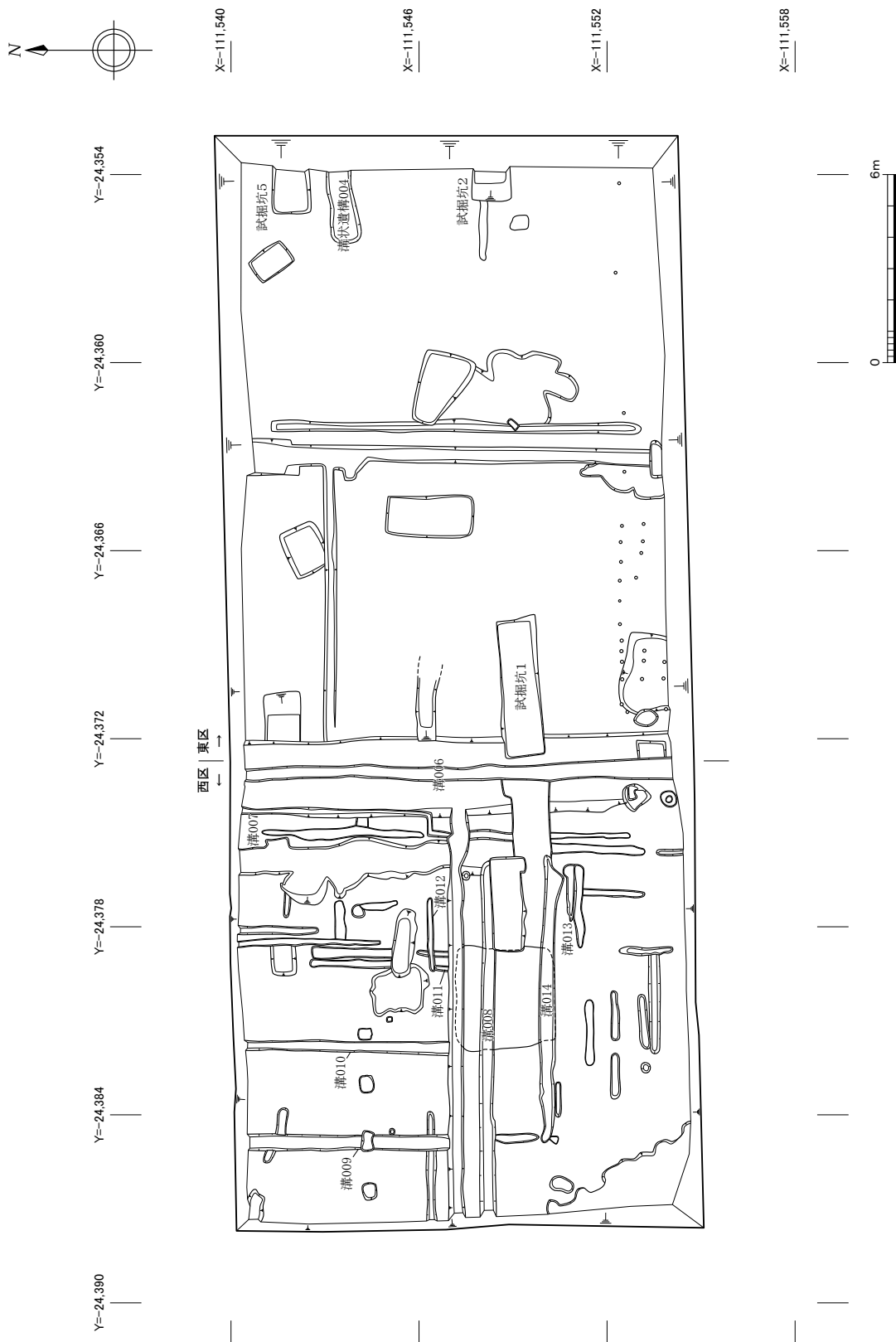
調査区南壁土層断面図（1：100）

調査区北壁土層断面図（1：100）

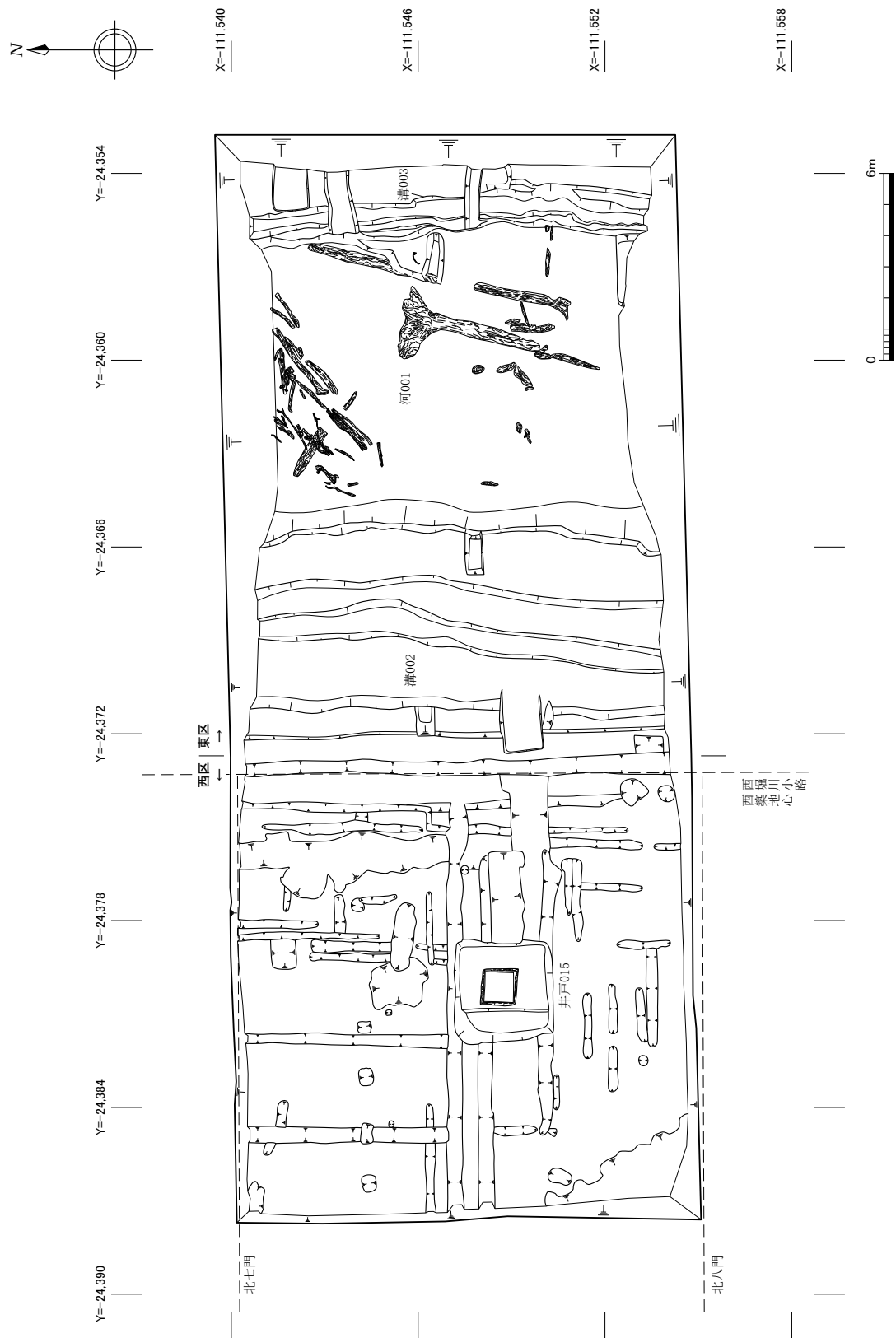




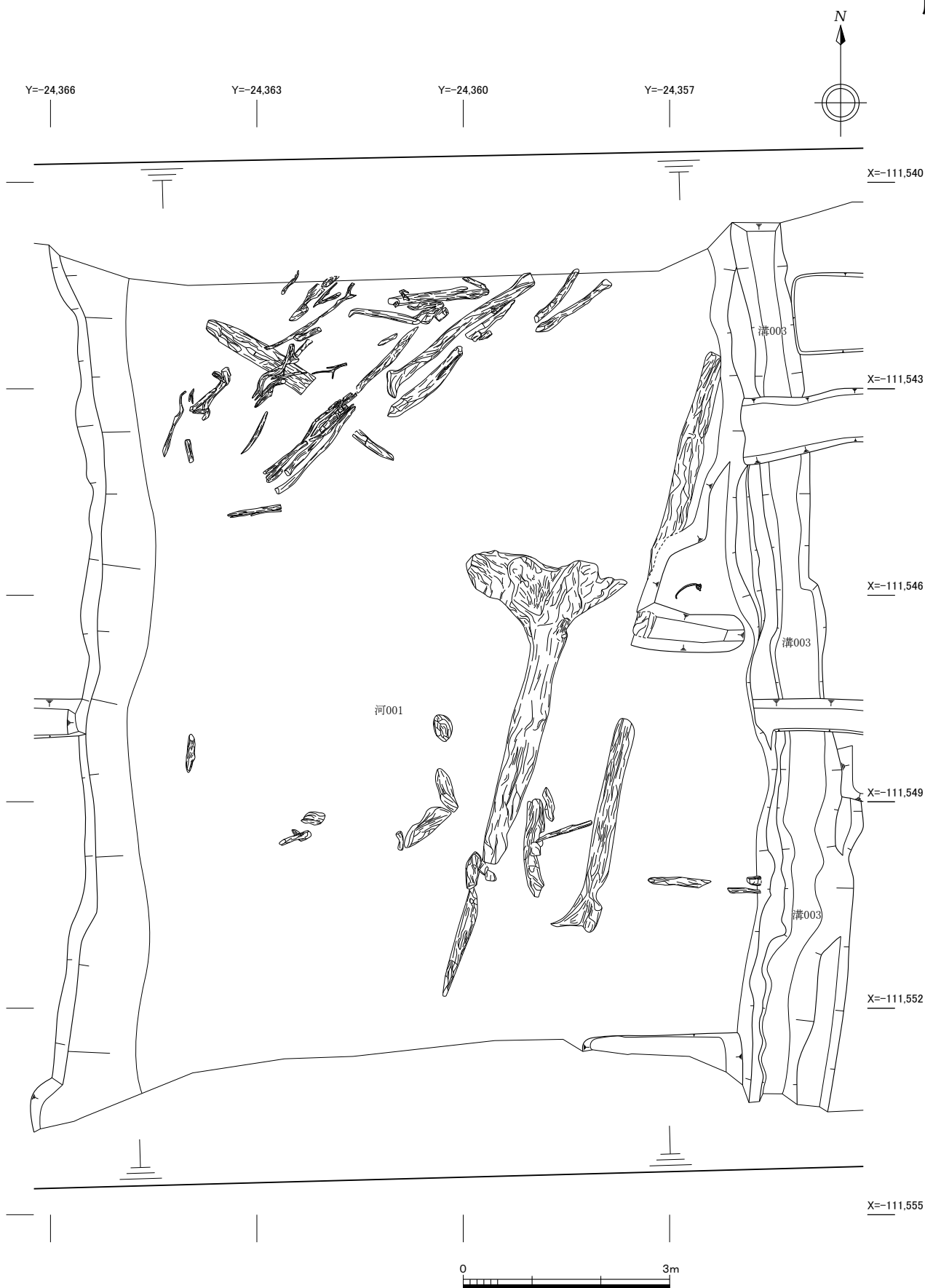
東区東西セクション土層断面図（1：100）



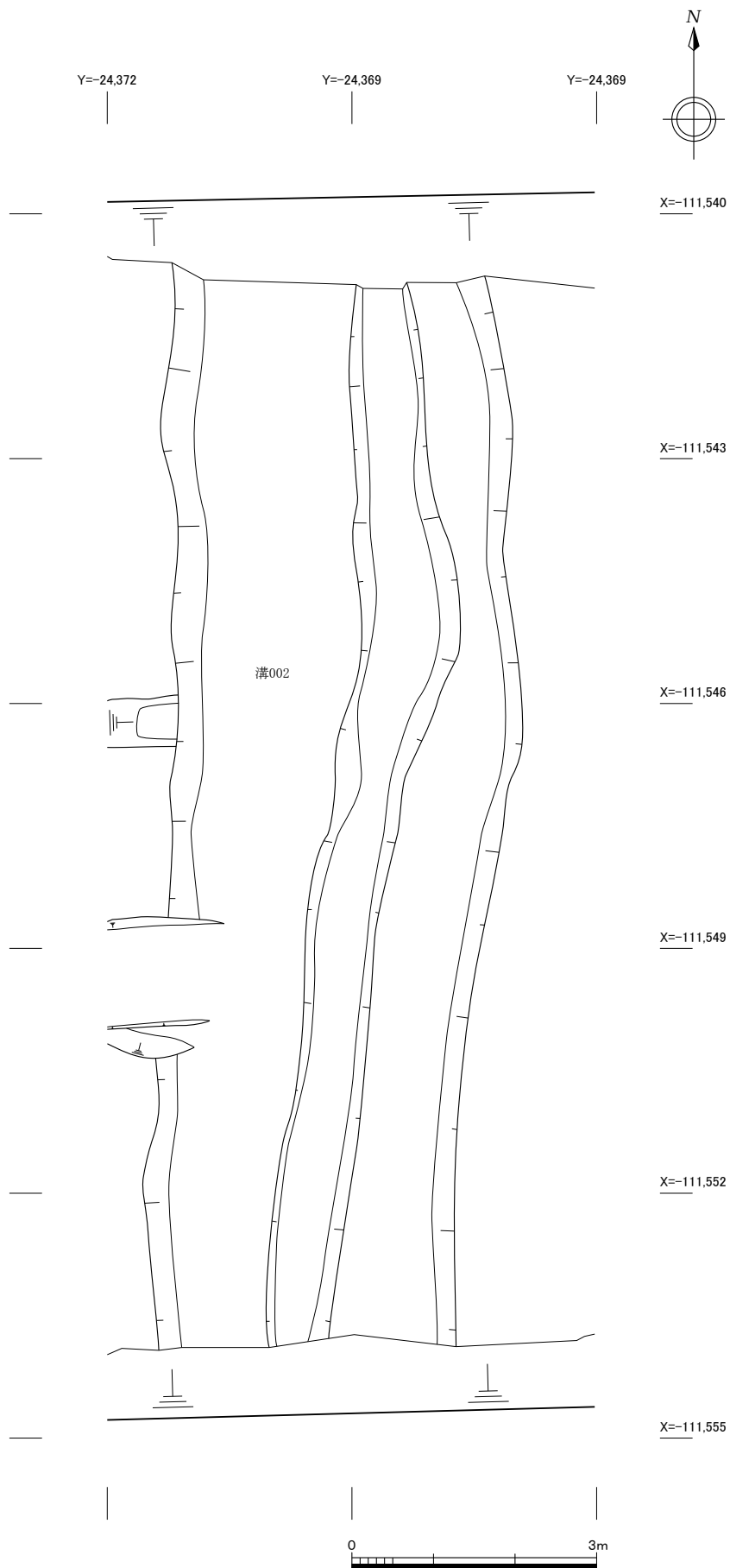
第1面 調査区全体平面図 (1 : 200)



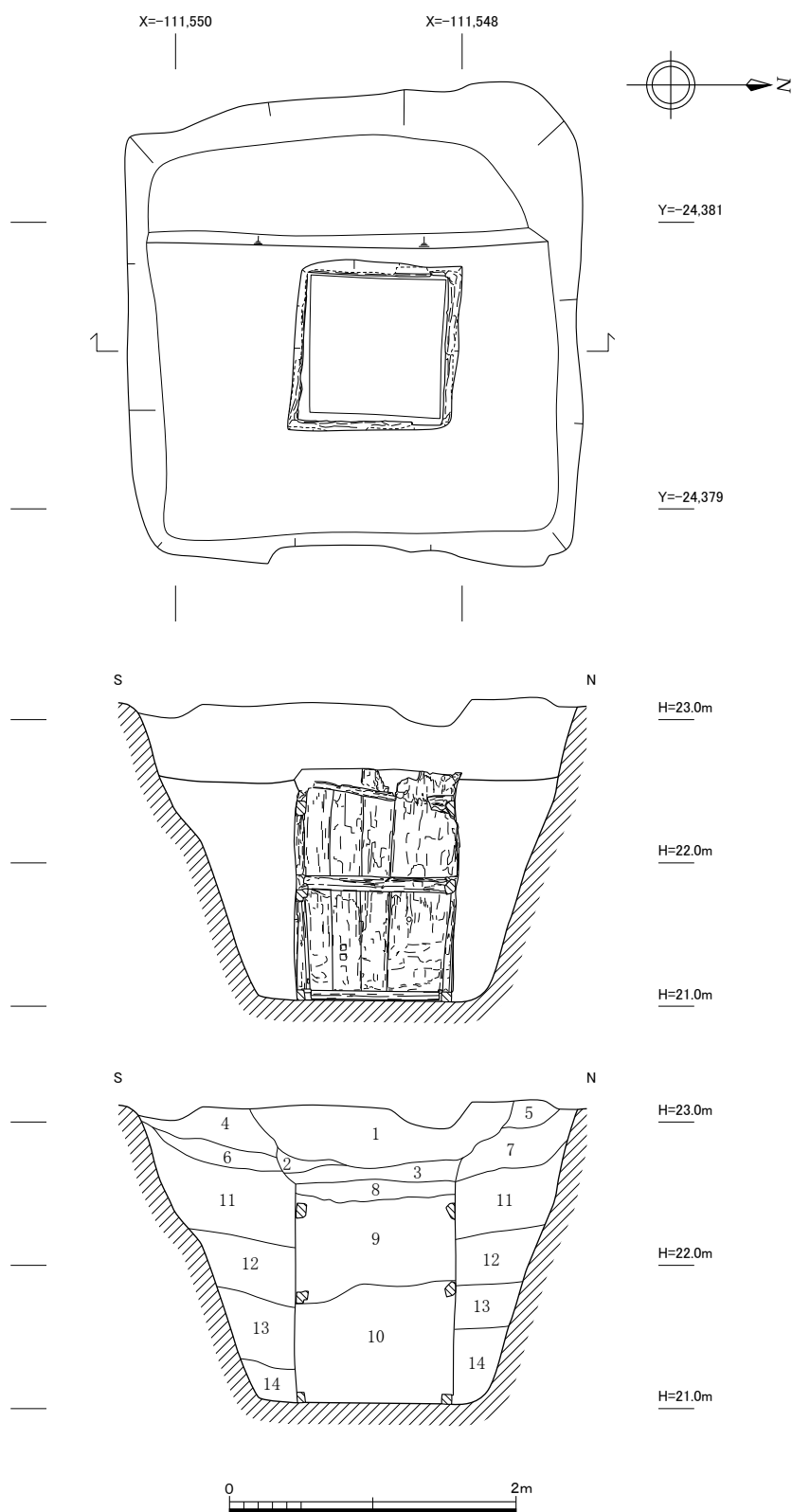
第2面 調査区全体平面図 (1 : 200)



東区 河001・溝003平面図 (1 : 80)

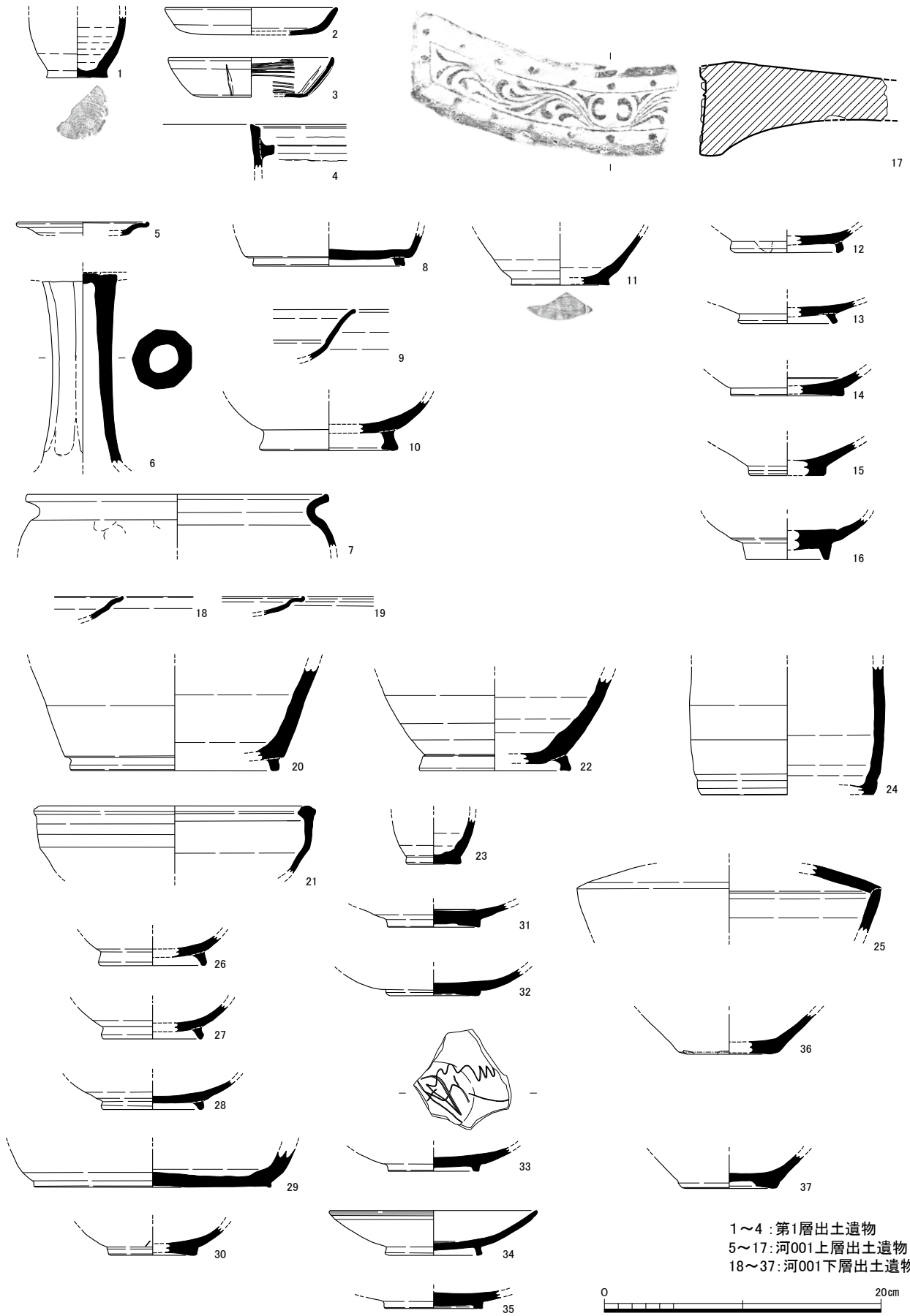


東区 溝002平面図 (1 : 80)

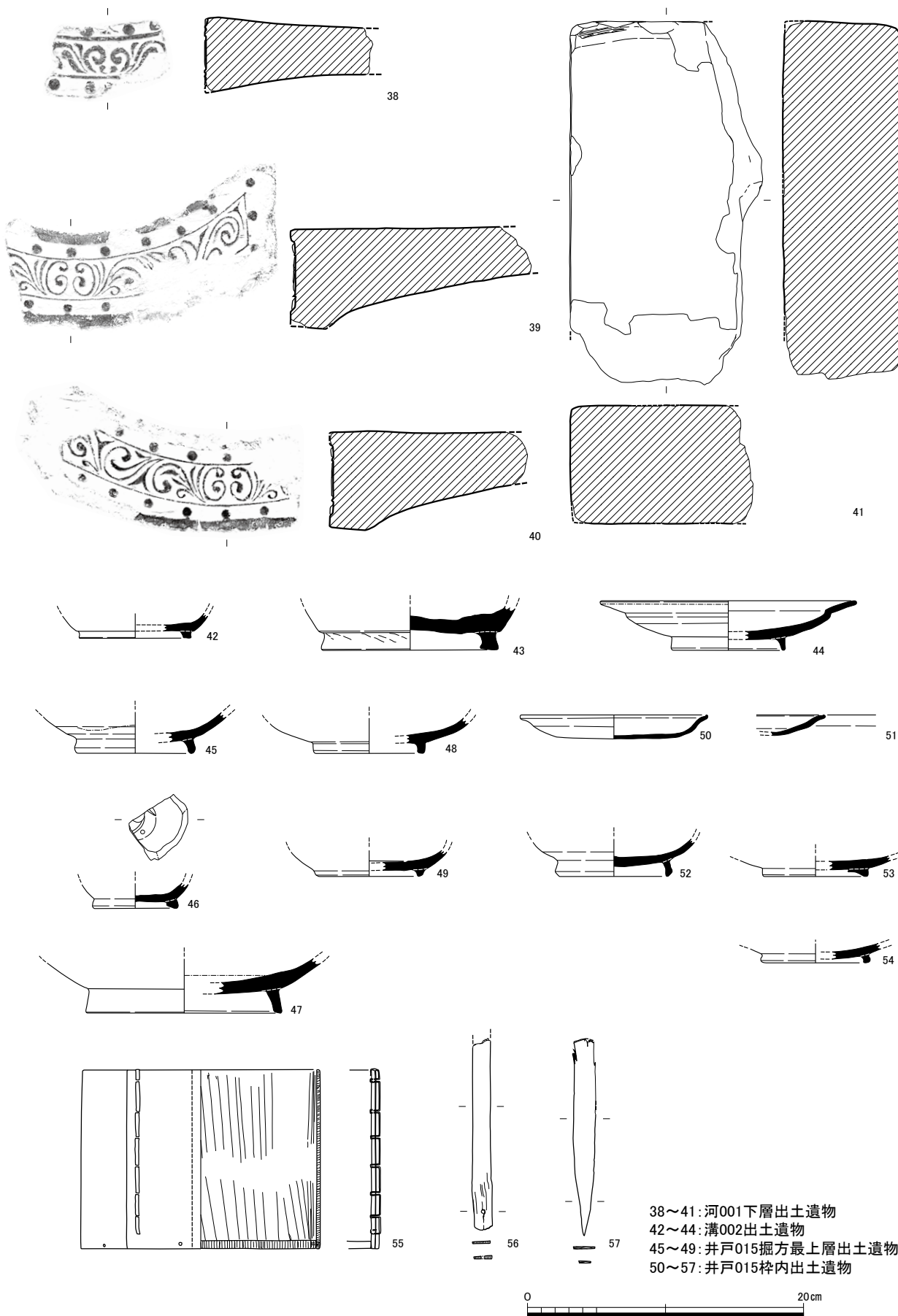


- | | |
|---------------------------------|---|
| 1 10YR5/2灰黄褐色シルト～極細粒砂 マンガン粒・遺物含 | 9 2.5Y6/2灰黄色細粒砂 粘質強 7.5YR7/6橙色粗粒砂・拳大の礫含 |
| 2 10YR7/1灰白色極細粒砂 粘性有 | 10 N4/0灰色シルト～極細粒砂 粘性強 |
| 3 N6/0灰色細粒砂 粘性有 鉄分・炭化物含 | 11 7.5YR7/6橙色極細粒砂～細粒砂 粘性有 粗粒砂含 2.5Y7/1灰白色極細粒砂 粘性有ブロック斑状に含 |
| 4 10YR8/2灰白色細粒砂 鉄分・マンガン粒含 | 12 10YR5/1褐灰色粗粒砂 10YR5/1褐灰色シルト～極細粒砂 粘性有ブロック含 |
| 5 10YR5/1褐灰色粗粒砂 | 13 7.5YR5/6明褐色細粒砂 粘性有 φ5cm前後の礫含 |
| 6 7.5YR6/2灰褐色極細粒砂 粘性有 | 14 5BG6/1青灰色シルト～極細粒砂 粘性有 φ5～10cmの礫含 |
| 7 10YR8/6黄褐色極細粒砂～細粒砂 粘性有 | |
| 8 7.5YR7/6橙色極細粒砂～細粒砂 粘性有 | |

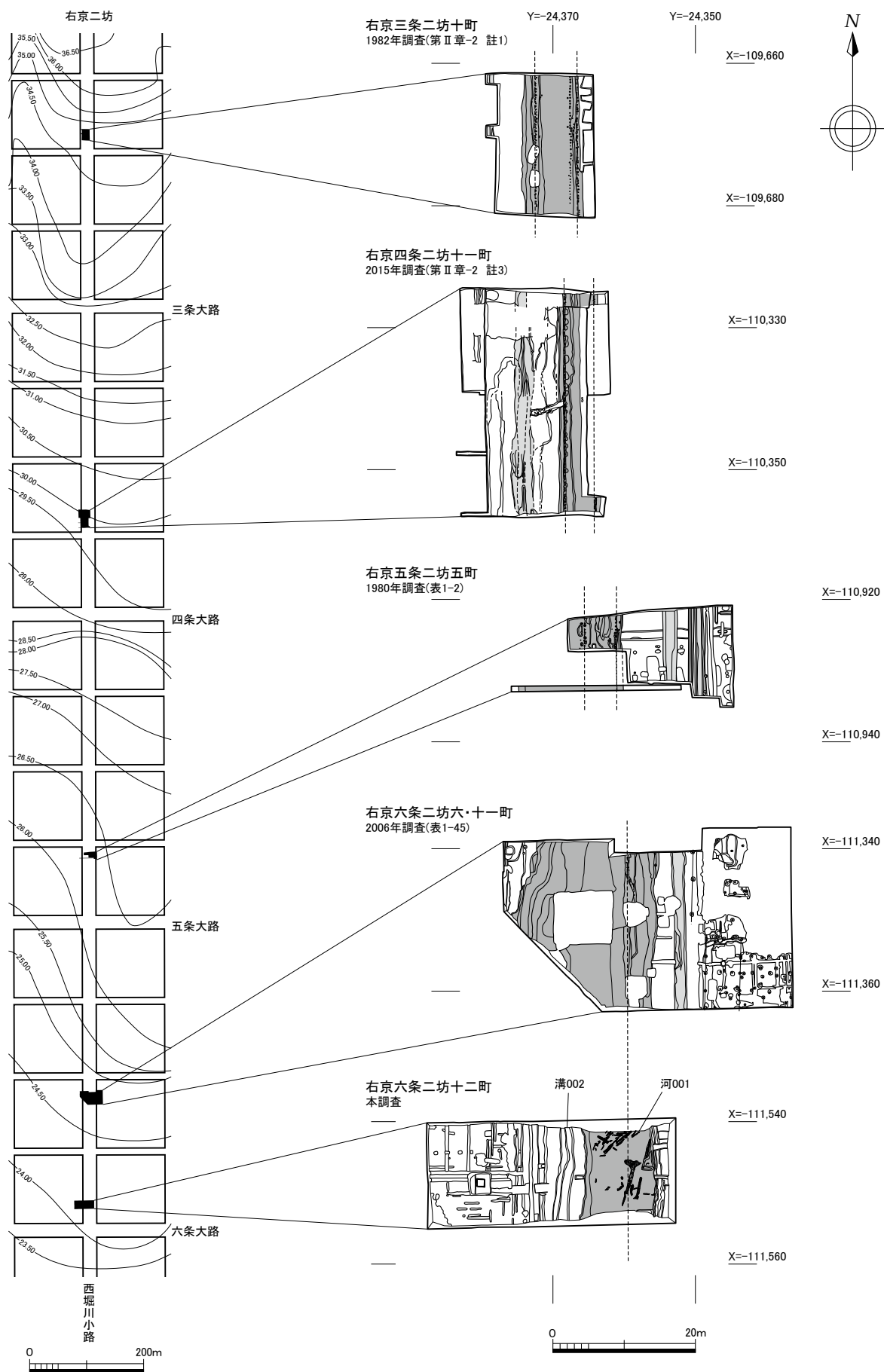
西区 井戸015平・立・断面図（1：50）



出土遺物 1 (1 : 4)



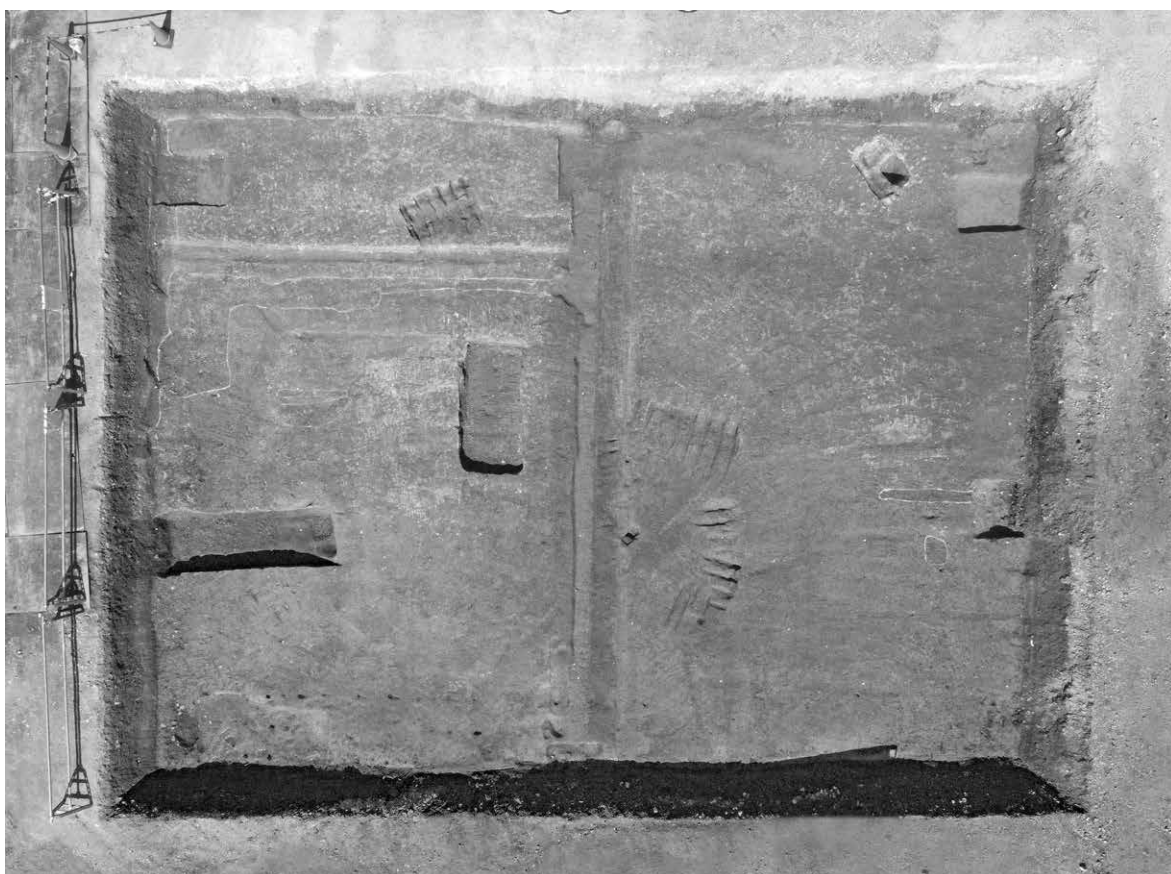
出土遺物 2 (1 : 4)



西堀川小路検出地点配置図 (1 : 10,000、1 : 800)



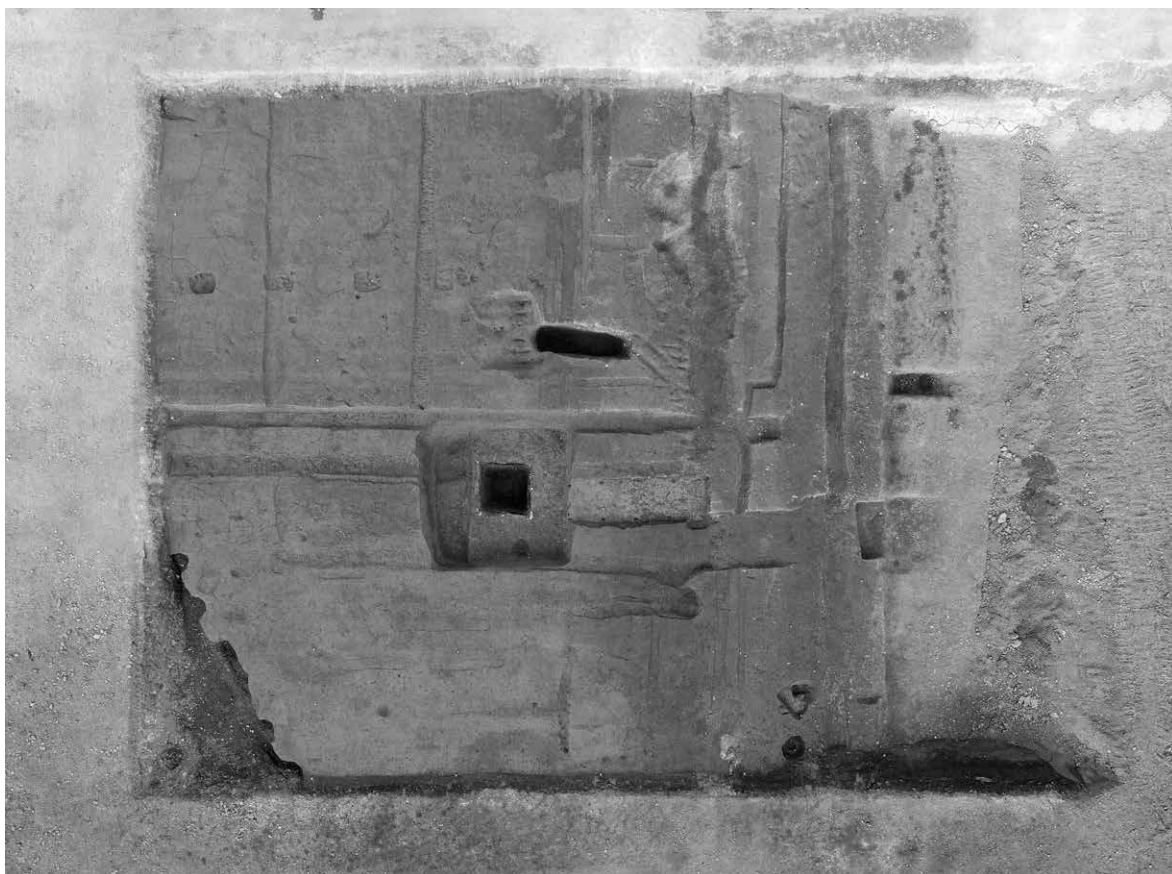
1. 調査地遠景（調査地上空より北方 五条通りを望む）



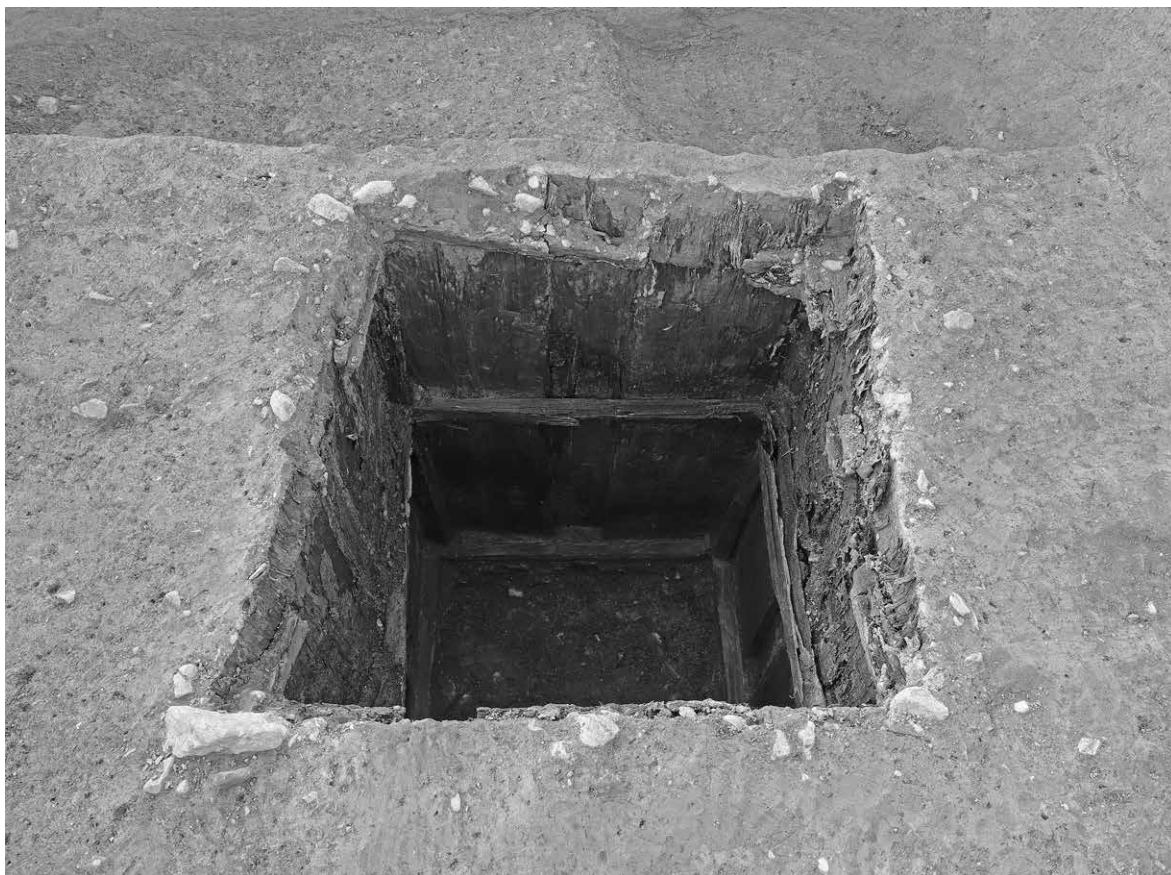
2. 東区第1面 遺構検出状況（上が北）



1. 東区第2面 遺構完掘状況 (上が北)



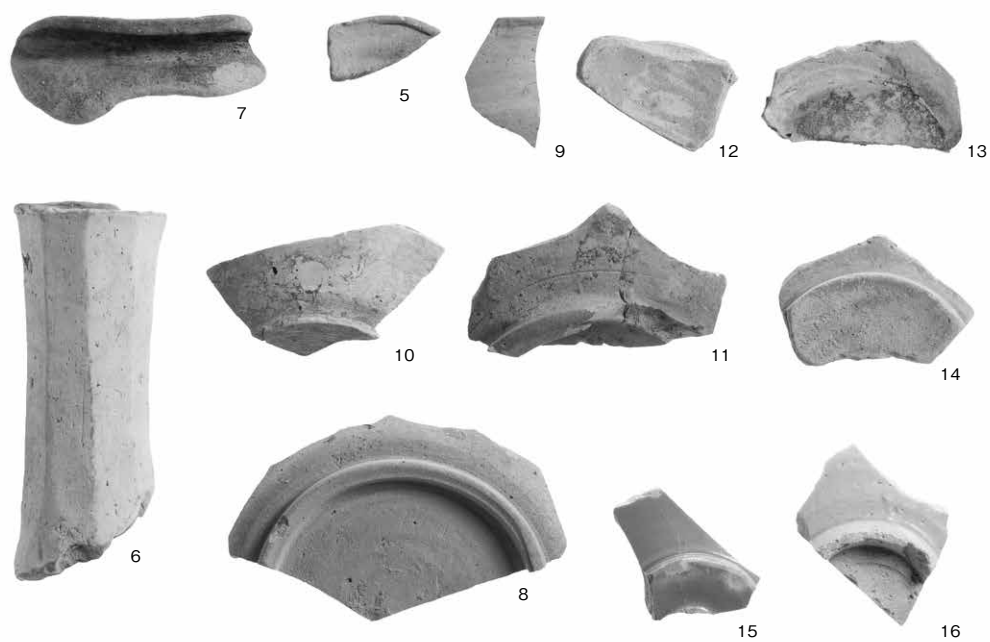
2. 西区 遺構完掘状況 (上が北)



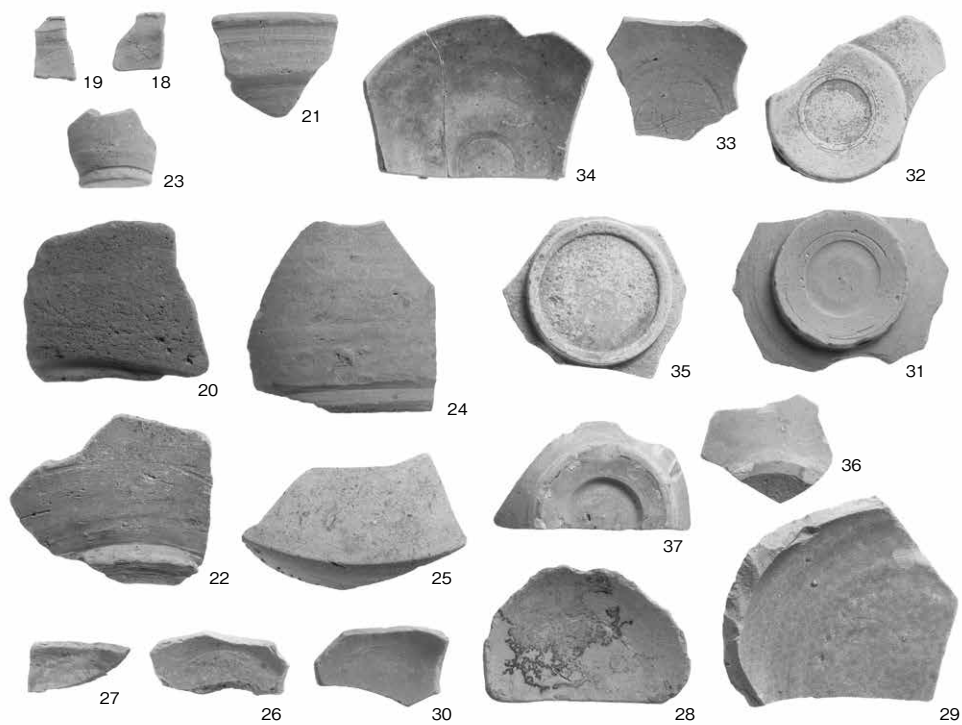
1. 西区 井戸015枠内完掘状況（東から）



2. 西区 井戸015掘方半裁断面（東から）



1. 河001上層出土遺物



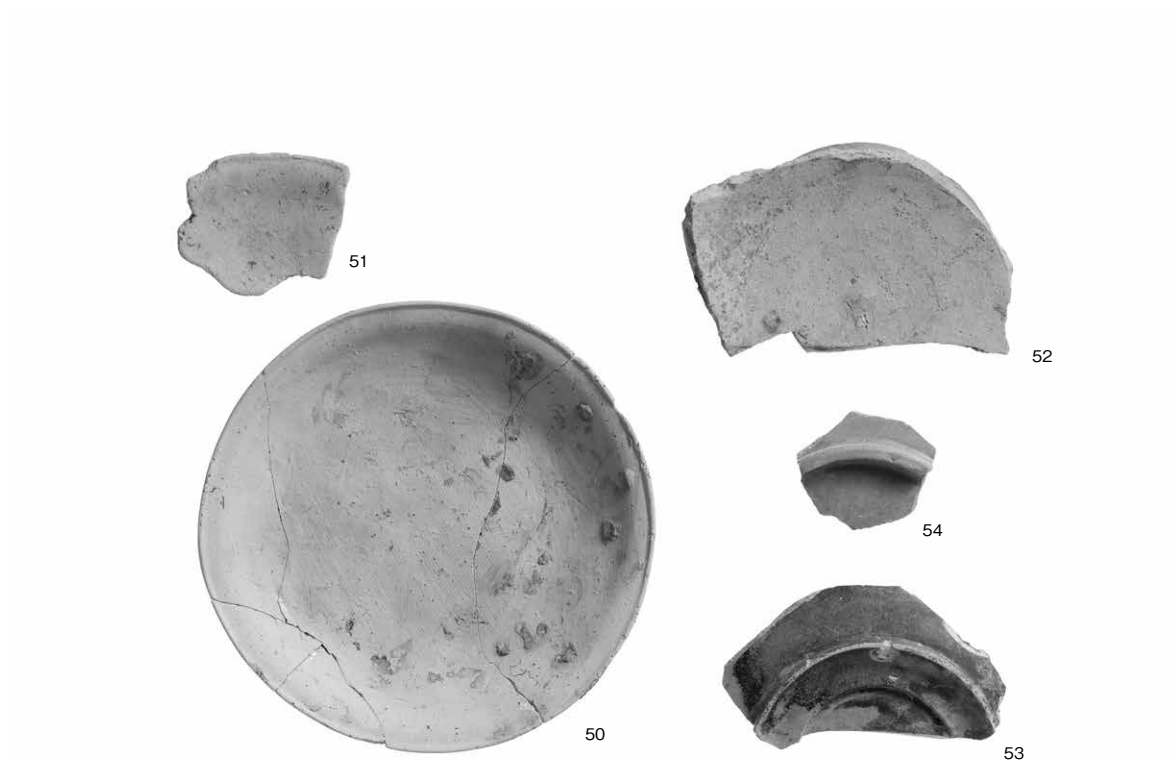
2. 河001下層出土遺物



1. 河001出土瓦・埴



2. 溝002出土遺物



1. 井戸015粹内出土遺物



2. 井戸015粹内出土木製品

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょううきょうろくじょうにぼうじゅうにちょうあとはつくつちょうさほうこくしよ							
書名	平安京右京六条二坊十二町跡発掘調査報告書							
シリーズ名	文化財サービス発掘調査報告書							
シリーズ番号	第15集							
編著者名	辰巳陽一 辻本裕也							
編集機関	株式会社 文化財サービス							
所在地	〒612-8372 京都市伏見区北端町58							
発行所	株式会社 文化財サービス							
発行年月日	2021年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょうろくじょう 平安京右京六条 にぼうじゅうにちょうあと 二坊十二町跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 さいいんひがしなみずちょう17ばんち 西院東中水町17番地 きょうとししもぎょうく 京都市下京区 にしななじょうおんまえたまち4ばんち 西七条御前田町4番地	26100	1	34度 99分 42.3秒	135度 73分 28.9秒	2020年 10月5日 ～ 2020年 12月18日	525㎡	ビル建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
平安京右京六条二坊十二町跡	都城	平安時代		河（西堀川） 井戸		土師器 須恵器 黒色土器 緑釉陶器 灰釉陶器 瓦 木製品		・平安時代前期の遺物を包含する西堀川の流路遺構、同時期に属すると考えられる井戸1基を検出した。 ・右京六条二坊十二町における西堀川と宅地の消長、その後の土地利用のなされかたを明らかにする資料が得られた。
		中世		耕作溝		土師器		

文化財サービス発掘調査報告書第15集

平安京右京六条二坊十二町跡 発掘調査報告書

発行日 2021年3月31日

株式会社 文化財サービス
編集 〒612-8372 京都市伏見区北端町58
TEL 075-611-5800

三星商事印刷株式会社
印刷 〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下る
TEL 075-256-0961